
イリア・サロニケ（エト・エウトクタ外伝）

永良隆樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イリア・サロニケ（ヒト・エウトクタ外伝）

【Zコード】

Z6836A

【作者名】

永良隆樹

【あらすじ】

少女は金髪のショートカット。少年のように帽子をかぶり、細面でどことなく東洋系の顔立ち。男物のミリタリージャケットを着込んでいる。袖口から細い指先がほんの少しのぞいている。ボトムは砂漠色の迷彩パンツにコンバットブーツ。そしてオートマティックが二丁、ミニ・ウージー二丁、ポンプアクション式ショットガン一丁。戦う相手は、悪魔崇拜者の手により不当に蘇った死者。

シーン1～5

シーン1 口ス

ロサンゼルス、ひと氣ない倉庫。積み上げられた木箱の影に男は身を隠した。

エルゼルの奴らは全て殺した。残るは一人。だが奴は人間ではない。ゆつくりと近づいてくるその足音。拳銃のマガジンを入れ替える。焦つて手が思うにまかせない。

男は太いジッポ（厚みは普通のジッポの倍、大きさも一回り大きい）を取り出し、中の綿を抜いて銃弾をひとつ詰め込んだ。アニナ、気付いてくれ。俺の弾は当たらなかつた。だが、お前ならあるいは……。

足音がすぐそばで止まつた。スーツ姿。長髪の日本人。青白い顔に鋭い目。

彼はオートマティックをかまえ、現れた男に向かつて立て続けに撃つた。男は避けるそぶりすらない。もう、見抜かれている。銃弾は全て命中したが、何事も起こらない。銃弾は全て男の体に吸い込まれた。敵の爪が伸びた。指先とともに。鉛色に変わつている。

その爪で彼のミリタリージャケットの襟をつかみひきおこした。サブマシンガンに握り替え、敵の腹部に無数の銃弾を撃ちこんだ。しかし、弾は全て敵の体に飲み込まれただけだ。服に無数の穴を開けただけ。何の傷も負わせるることは出来ない。

「渕上。サロニケは必ず貴様を倒す……」それが最後の言葉となつた。

長い爪が喉を切り裂いた。後の言葉は声にならなかつた。
アニナ……。娘の名。

シーン2 入国審査

シルバニア公国だつて？ いつたい何処の国だ。

差し出されたパスポートを見て係官は思った。なんとなく聞いた事はある気がするが、違う、アレはウサギの人形シリーズだ。

「お嬢さん、一人かい？」

少女は金髪のショートカット。少年のように帽子をかぶり、細面でどことなく東洋系の顔立ち。男物のミリタリージャケットを着込んでいる。袖口から細い指先がほんの少しのぞいている。ボトムは砂漠色の迷彩パンツにコンバットブーツ。周囲に保護者らしき人間は見当たらない。

「保護者は？」

「いないわ」少女は平然と答える。

十六歳くらいに見えるが、パスポートには十三歳と書いてある。

「渡航目的は？」

「観光」そっけなく答えた。

「一人で？」

「ガイドブックがあるわ」少女が見せた本を見てますます目が点になつた。その本の表紙には忍者が茶室に座つていて床の間に大仏みたいな仏像があり、天井には提灯がさがつていて。その本に従えば間違いなく生きて日本から出られないのではないかと感じた。

しかし確かに観光ビザもちゃんとある。手荷物にも不審な点はない。たぶんホームステイの口だ。ロビーにはホストファミリーが迎えに来ているだろう。係官はそう思い、パスポートに判を押した。

「よい、旅行を」パスポートを返した。

「チャオ」旅券を受け取ると、少女は細い腕にバッグを担いで去つていった。

彼女の名はイリア・サロニケ・アニナ。ルーマニアはトランシリバニア山脈の奥深くにある小国、シルバニア公国の古い貴族の家柄の生まれ。彼女の家系は先祖代々、悪魔崇拜者やバンパイアを始末

してきた。イリアは爵位、サロニケは家名、アニナが名だ。

バンパイアとは本来の意味でのバンパイア。それは映画の吸血鬼などではなく、悪魔崇拜者達の儀式により不当な方法で蘇った死者。人間社会にまぎれている。で、大抵、悪魔崇拜者と絡んでいる。

一般的にバンパイアは銃で撃つても弾を避けるほど敏捷である。弾が当たっても平気な者もいる。十字架もんにくも聖水も効かない。バンパイアと呼んで、人がイメージするものとはまったく別物である。それは、パーフェクトを意味する。

シーン3 空港ロビー

ロビーに出ると微かにかび臭い空気が漂っていた。湿っている。雨でもないのに雨の臭いがする。

確かにカメラを持つている人が多いわね。チューインガムを噛みながらアニナは思った。みんな手に携帯電話持っているし。ガイドブックに書いてあるとおりだわ。

礼節を重んじる武士の国、日本に来たのだ。にしては、なんとか軽い雰囲気は感じるけれど。けれど、さつきの入国審査官も賄賂を要求しなかつたし、誰にもチップをあげる必要はないみたいだ。チップではなく気持ちを渡すというのは本当みたい。

それにしても、空港に近衛兵の姿がまったくないのも異質だ。いるのは民間人ばかり。広すぎるし。街みたい。

これから向かうべき街の名はわかつている。新宿。そこに渕上はいるはずだ。

父からの最後の手紙にそうあった。それは彼が死ぬ一日前にロスから出されたものだ。
殺された。

彼女は家業が大嫌いだ。しかし、父の仇は討つ。必ず。
まっすぐ新宿へ行きたいところだが、その前に寄るところがある。

シーン4 リチャード・ナルソン

「驚いたな。君のような少女が来るとは思つてもみなかつたよ」現れた少女に、米師団長リチャード・ナルソンは目を丸くして言った。

「君がイリア・サロニケ・アニナ？」信じられないといった表情。「ええ。どういう意味です？」握手をし、平然と腰をおろしたアニナ。相手のオーバーな驚きように疑問符を投げかけた。

「ああ、いや……」ソファに深く座りなおしたリチャードは口ごもつた。

「もつと……そう。もつとお婆さんが来るものだと思っていた」「エクソシストとしか聞いていなかつた。そう言つて笑つた。アニナもつられて軽い笑みを浮かべた。

リチャードはテーブルの上にコインロッカーのキーを置いた。「頼まれたモノを入れておいた。新宿駅のコインロッカーだ。地理は分かるかい？」

「ガイドブックがあるから」心配いりません。
おそらくそれを見せれば、親切なリチャードは部下に案内させただろう。が、知る由もない。

「このデスクの電話番号だ」メモを渡した。

「わかりました。色々とありがとうございました」
礼を言つて部屋を辞そうとする彼女に、リチャード・ナルソンは言った。

「また、会えるかな」

「たぶん」ふりかえり、笑みを返した。

新宿

シーン5 コインロッカー

JR新宿駅のコインロッカー。アニナは大きなバッグを引っ張り出した。

女性用トイレの個室に入つて中身を確認する。

オートマティックが二丁、サブマシンガン二丁、銃床のないピストル・グリップのポンプアクション式ショットガン二丁。扱い慣れたそれらの銃器。そして有り余る銃弾。携帯電話。

特に彼女が依頼して調達してもらつたサブマシンガンは、イスラエル製のミニ・ウージー。全長三十六センチ。服の下に容易に隠せる。最新型のそれはMP5と同じクローズド・ボルト方式になつており、命中精度が向上している。

だぼだぼのジャケットの下に隠して身に付けた。腹に二丁のオートマティック、腰に二丁のミニ・ウージー。ショットガンはカバンに入れた。

シーン6～7

シーン6 パブ『グレイトフルデッド』

かなり広いパブだが、満席でホールも混雑している。一癖も二癖もありそうな人間が、カウンターを占領している。紫煙が立ち込め、低音を強調したD.Jスタイルのレゲエが空気を揺らしている。日本人だけでなく外国人の姿も多い。訛りの強い英語が音楽に負けないボリュームで飛び交う。その人ごみの中をするすると抜けていく奇麗な顔の少年がいる。すれ違ひざま黒人の一人が声をかける。少年は背の高いほうだが、黒人のほうが頭ひとつ高い。

「祐一、今日はひとりか」

「後からみんな来るよ。ガンジャ欲しいの？」

相手がうなずくと「じゃあ、後で」と言って立ち去る。黒人の知り合いが多いらしく、すれ違うたび「祐一」と声をかけられるが、「ハイ」と軽く手をふり歩いてゆく。呼び止めるほうは用がある様子だが、いちいちかまつていられないといった風だ。用件はわかっている。ガンジャだ。

彼の名は野原祐一。高校一年だが学校にはほとんど行っていない。気分は中退だ。ドラッグの中卸グループで外人客相手に通訳のようなことをしている。と言うと仕事のようだが、そうではない。

要は大麻愛好会（と呼べばかわいいが）のようなグループがあるわけだが、つてがあつてグラム三千円で手に入る。それを自分達も楽しむが時に五千円で売る。商品に混ぜ物がないから顧客が多い。で、外国人の客も多い。英語をしゃべるのが祐一ひとりだから、自然通訳のようになる。祐一以外は皆二十代だ。ろくでもない人間達。まともに働いている人間はない。

今日は大役を言い付かっている。皆の都合がつかないから、彼が品物の受け取りに行かなければならない。大金が懐にある。それも落ちつかないが、受け取りのことを考へるともつと落ちつかない。

相手は当然組関係者だ。俺の顔憶えてくれるといいんだけど。取引は一時間後。

祐一は店を出た。夜の新宿のネオンがキラキラと奇麗だ。勿論、一服キメている。

さて、一時間、どうやって暇つぶそう。ナンパでもしようかな。祐一の目に、金髪の少女が目にとまつた。馬鹿でかいミリタリージャケットにボトムは砂漠色の迷彩パンツ、コンバットブーツ。少年のようにキャップをかぶりサングラスで目を隠している。旅行者かな？

シーン7 路上

相変わらず湿った風の臭いがする。それは日本の何処にいても感じる。

さて、これからどうする？ アニナは自問自答する。戦う準備はできた。新宿に来た。しかし敵の居場所はわからない。当然だが、ガイドブックにもジャパニーズマフィアについては一言もない。そして新宿は彼女の想像よりもかなりでかかった。

ここはまるでディズニーランドみたいだ。そう思った。本物のディズニーランドには行ったことがないが。

ガイドがいるといいんだけど。この街の裏事情に詳しい人間が誰か。

それにしても驚いていた。タクシー料金だ。ちょっと乗っただけで、彼女の国の羊飼いの月収分と同じだった。

「ハイ」声をかけられた。

「何してるの」

見れば、自分よりかなり年下の（そう見えた）男の子だ。子供がこんな時間に、いるのか。驚いた。貧困国にはストリート・チルドレンがいるものだが……。ここは日本だ。

「日本語話せる？」

「いや……」

「そう、じゃあ来たばかりなんだ。日本は何日田?」

「今日、來た」誰だ。この子供は。いやに馴れ馴れしいが。

「君、観光? それとも仕事?」

そう聞かれて戸惑つた。観光ではない。家業だから仕事になるだ
うひ。

「仕事だ」と答えた。

「へえ」

それを聞いて少年は面食らつた様子だった。アニナには知る由もなかつたが、この街で仕事と言えば風俗だ。

「君、いくつなの? 若く見えるけど」

「十三歳だ」何か問題あるのか。それよりこいつはナンなんだ。

少年はますます面食らつた様子だった。

「まあいよ。年ごまかして働くつもりだらうけど、やばいんじゃない」

「こいつ何の話をしている?」

「別に年はこまかさない」

「こよいよ少年は仰天した。えつ!? そんな店があるのか!? いや、まさか。東南アジアならともかく、日本国内にそんな店があるはずがない。」

「君、何処の国の人?」

「シルバニア公国」

「ああ、シルバニア!?」って何処だ? アレはウサギの国じゃなかつたのか。

「お前は誰だ? わたしに何の用がある?」用がないなら立ち去れ。とばかりにアーナは言った。

「俺は祐一。ユウでいいよ。十六歳だ。この後、ちょっと用事があるんだけど、それが済んだら暇だから、良かつたら街を案内するよ。十六歳!? とてもそうは見えなかつた。自分より三つも年上とは。驚いた。が、それを口に出すのは相手に失礼だろう。何しろ武士の国だから。こいつはまず武士ではないが。それよりも……。ガ

イドができた。とりあえず街の案内くらいは期待できる。

「わたしは、イリア・サロニケ・アーナ」

交渉成立だ。

「チップは」ガイド料のことを見た。

「いいよ。そんなの。いるわけないじゃん」その返答に、やつぱりここは武士の国だと感心した。

「だけど、ちょっと野暮用があるンだ……」歩きながら少年はしゃべつた。

「わたしもこの街に用がある」

「へえ。どんな？」

「渕上という男を捜している」

「渕上？ 誰？ それ」それだけじゃあ。ねえ。

「黒龍会というジャパーネーズマフィアにいるはずだ

「はああー！」

祐二は仰天した。し、混乱もした。思わず足が止まった。こいつはやばい女じゃないのか。かかわらない方が身のためかも知れない。しかし、スルーするには可愛すぎる。せっかくここまで話もしたのに。

で、正直なところを切り出した。

「実は、黒龍会だつたら今から会うンだ。まあ、本家じゃなくて分家の方の下つ端の人だけど……」

「へえ……」ラツキー。わたしはついている。

「連れて行け」彼女としては銃口をつけたい気分だ。

「うーん。まあ。いいとは思うけど」こんな可愛い子連れて取引に行けば、余裕に見られるかもナ。呑気な彼は思った。

シーン8～9

シーン8 地下駐車場

人気のない地下駐車場に、黒い大型セダンがゆっくりと入ってき
て、待っていた祐一とアーナの目の前で停まった。黒いフィルムを
貼ったウインドウがゆっくりと下がる。

「お前か。見たことがある。確か祐一とかいったな」

上半身、下着姿の極道が言つた。太い腕の下着の端から刺青がは
み出している。

「電話で聞いたよ。今日はお前が代理だつて？」

「はい。先輩達はみんな来れなかつたンで。金は持つてきます」

「その女はなんだ。お前の女か」アーナをじろつと睨んだ。

「ええ。まあ」そういうことにしておいたほうが良いだらう。

「いい女連れてるじやねえか。今度、俺にも紹介しろ」

「はい、まあ」

「乗れ」

そう言われて、祐一はアーナを促して後部座席に乗り込んだ。

今日はグラム三千円で一千グラムの取引。相手が金を数える間、
待たなければいけない。なんとも落ちつかない。金を数え終わると、
男は品物をダッショボードから取り出して、投げて渡した。アーナ
が訝しげにそれを見た。

「ところで、ちょっとお聞きしたいんですけど。測上もんつていら
つしゃいます？」

「本家のほうの方かも知れないんですけど」

「氣を利かせて祐一は聞いた。が、すごまれた。

「おい、余計な事聞くじやねえか。それを聞いてどうする気だ。あ

「いえ、そんなつもりは……」

「これ以上は聞けない。それに取引は終わりだ。祐一はあいまいに
『まかし、アーナを促して車から降りた。

「ありがとうございました。またお願ひします」車のなかの相手に頭をさげた。

「そりやあ、こっちのセリフだ。要るときはいつでも連絡しり」

そう言つて車は去つていった。駐車場に静寂が戻る。

「渕上さんつて人のこと聞いたけど駄目だつたよ」祐一はさつきのやり取りを説明した。それを聞いてアーナは悔しがつた。日本語がわかれば銃を突きつけてやつたのに。

「ところで、今お前は何をしたんだ」アーナは取引のことを見た。「え、ガンジヤを買つたンだよ。ガンジヤわかる」

「麻のことか」

「ああ、そつそつ。よく知つてるジャン」

「何故そんなものに金を払う」しかも、こんなまるでドラッグの取引みたいな真似をして。彼女には不思議でしようがない。

「だつて法律で禁止されているドラッグだからだよ」

「イリー・ガル?? ドラッグといつのは幻覚性のある植物を精製したモノだらう。それは麻を乾燥させただけじゃないか」

「それでも、日本じや法律で禁止されてるンだよ」祐一は大事そうに包みを上着の内側に入れた。アーナは納得がいかない表情。

「おかしな国だ」なにしろ、彼女の城の周りにはいくらでも野生の麻が群生している。不思議に思つても当然だ。

あつ、と祐一が鋭い声をあげた。続けて、なんだ、吃驚させやがつてと安堵の言葉を吐いた。

「どうした」アーナが聞くと、

「いや、誰もいないと思つていたら、あそこ」祐一が指差すほうを見れば、駐車場の壁にもたれて浮浪者がひとり座り込んでいる。彼らには興味なさげに。

「ホームレスだよ。ビックリしたぜ」

その姿を見て、アーナの瞳が鋭くつりあがつた。片手で祐一を押し止めた。

「ホームレスじゃないわ」

え、じゃじゃあ、ひょっとして刑事か。一瞬にして青くなる祐一。

「あなたの国の警察はそんなに優秀?」空港に近衛兵もいないのよ。アレで治安が守れるかしら。

「じゃあ、なんなんだよ」まさかホームレスが俺のガンジャを狙つてんのか。

「違うわ。たぶん、わたしに気づいて後を追ってきた……」

はあ? 何のことか意味がわからんねえよ。しかし、アニナがミリタリージャケットの前をはだけ一丁のオートマティックをかまえるのを見て、

「げ、こ、殺すのか」腰を抜かしそうになつた。何故、そんなものを持つている。

「殺す? もう、死んでるわ」

浮浪者が立ち上がつた。

「どうやって俺を倒す」自信に満ちた声で浮浪者は言つた。その目は獣の目。

「げえ、こいつ英語しゃべりやがつた。浮浪者だから学がないとは限らない。いや、そんなことより彼はパニッシュだつた。死んでると言われたけど、でも死んでないし。

「試しに一発撃つてみましようか」不敵な笑み。

アニナが言い終わると同時に、浮浪者はもの凄いスピードで突進してきた。人間の動きではない。

銃声が一発轟いた。アニナが撃つたのだ。

浮浪者は弾を避けた。人間業とは思えぬ俊敏さで。

ぎゃあ、人間じゃねえ。殺される、祐一は本能で感じた。

次の瞬間、一発の銃声が続けざまに轟いた。祐一は顔を伏せた目の端でそれを見た。一発目の弾を浮浪者が避け、その避けたところに一発目の弾が当たる瞬間を。

目前に迫っていた浮浪者は、その瞬間灰の塊となり、突進してきた勢いもそのまま祐一の上にどしゃつと覆いかぶさつた。

「うぎやああああ」なんなんだ、こいつは。なんなんだ。こいつ

は。

「なんなんだ、こいつは」喉を嗄りじてやつとの思いで声を絞り出し聞いた。

「バンパイアよ」こともなげな答えが返ってきた。

「そんな、馬鹿な」灰を必死で払いのけながら祐一。

「今、見たでしょ？」

「ど、ど、どうやって倒したんだ？」

「わたしは集中すると、一瞬後の未来が見えるの。つまり、コンマ五秒後の敵の動きが見える。だから一発目を撃つと同時に、敵が避ける先を狙つて二発目を撃つたの。今のはクラスの低いバンパイア。だから灰になつた」

いかれた女かとは思つていたが、こいつはマジでやべえ。

「お前、何しに日本に来たンだ」

「言つたでしょ。仕事」

「コレがか!?」「コレがお前の仕事なのか!? 絶対かかわりたくない！」

「バンパイアだと!! こいつは気が狂つてる!!

「いいか。お前に会つたこと、ガイドすると言つたこと、アレは取り消しだ。俺はお前なんか知らないし、会つてもいない。いいな」 フラフラしながら指を突きつけ言つたが、小首傾げて相手は答えた。

「それはいいけど、ここから生きて出られるかしら」

「どういう意味だ。いや、いい。俺はもう知らない。こんな女かかわるんじゃなかつた。ひとつとグレイトフルデッドでみんなと合流しよう。今夜はガンジャパーティーだ。今のこと全部忘れよつ。

出口へ向かいかけた足が止まつた。

人影が六つ。駐車場へ入つてきた。浮浪者たち。涙目でアニナをふりかえつた。

「情けないな。お前、日本人だろう」武士の國の。

なんと言わてもいい。祐一はアニナの背後に駆け込んだ。背中

越しに様子を伺う。

六体。まずいな。アナナは感じた。一体でも高位のバンパイアが混ざっていれば厄介だ。

祐二の手前余裕でかまえてみたものの、アナナは冷静さを失いつつあった。頭に血が上り、頬が紅潮する。瞳がつりあがつた。まあいい。かかるべきやがれ。こんな東洋の何処とも知れぬ場所で。

六体動いた。同時だ。

処女のまま死んでたまるかっ！！ 母国語で吐きすてた。

前に突き出した腕を交差させ、かまえた二丁の拳銃を立て続けに撃つた。

宙に跳んだバンパイアが灰に変わる。一体。一体。

姿勢を崩さず二丁の拳銃で撃つ。三体。灰が地に落ちた。もう、距離が近い。拳の届く距離。銃を持ったままの拳を顔面に叩き込む。同時に足を高くふりあげ、かけ蹴り。倒れた敵の頭に銃弾をぶち込んだ。足元を灰が舞つた。

残るは一体。

アナナと距離を取り、余裕で待ちかまえている。撃つてみる、と言わんばかり。

撃つてやる。お望みどおり。

バンパイアは一発目の銃弾を避けた。その顔面に一発目が命中した。銃弾は男の後頭部を大きく吹き飛ばして貫通したが、その動きは止まらない。

まずい。高位のバンパイアだ。すばやくオートマティックを捨て、三一一・ウージーを握る。

躍りかかってきた敵にまわし蹴りを放つた。避けられた。すばやく体を回転させ後ろまわし蹴り。敵の後頭部をかかとでぶち抜いた。倒れたその頭をミンチにしようとした銃口突きつけたとき、もう一体が襲い掛かってきた。

体をぶつけるようにして引き金を引く。腹に風穴を開けてやる。もつれ合って倒れた。その間、引き金は引きつ放し。銃弾は男の腹

をえぐりつ放し。だが、その腕はすごい力で彼女を放り投げた。□
ンクリの上に叩きつけられ転がった。

はらわたを垂れ流しながら男が立ち上がってきた。ゆっくりと彼女に近づく。

地を蹴つて飛び起きたと、跳躍して三六〇度回転しての蹴り。
男の体は吹つ飛び、立ち上がつていたもう一体の男にぶつかり、
二人とも倒れた。

チャンスだ。アニナは「王立ちして、倒れた二体のバンパイアの頭に銃弾を叩き込んだ。男達の顔面に見る見る穴が空いていく。頭がミンチになった。弾倉が空になった。それでも四本の腕が空をかいている。普通、死体は動かないが、動いている死体は頭を潰したつて動くものだ。

アニナは大きく息をつくと、ミニ・ウージーを収めた。それから地面に転がっているオートマティックを拾い上げ、腰を抜かしている祐一に言った。

「倒した。急いでここを出よう。銃声を聞きつけて警察が来るかもしない」

そ、そ、そ、そ、そりやあ、そうだ。コレだけ派手にぶつ放したら、既に通報されているはずだ。だ、だ、だ、だけど、だけど。

アニナは動転して口をパクパクさせていたる祐一の腕を引っ張りあげて立たせた。

「歩けるか」

祐一は無言で首をふり、再び尻餅をついた。

シーン9 逃亡

まだ足ががくがく震えている。何とか歩けるが……。

祐一はすたすたと前を歩くアニナを恨めしげに見た。なんだつてこんな奴とかかわったんだ。今日は厄日だ。新宿でナンパした女の子がバンパイアとドンパチするのが趣味だなんて確立はどれほどのものか……。あり得ない。

「コウ。まだ、震えているのか」ふりかえりアニーナが言った。

当たりめだ。口には出さず毒づいた。

「その」コーヒー・ショップに入ろう。コーヒーでも飲むといい

賛成だが、俺より年下の癖に威張った口をきいて……。

素直に従い「コーヒー・ショップに入る祐一」。

ホットコーヒーを頼み、運ばれてくるまでに、祐一は回らぬ舌で

懸命に聞いた。

「さつきの奴らはなんなんだ」

「バンパイアだ」

訝しげにアニーナ。その質問には答えたはずだが。

「映画に出てくるそれとは違う、本来の意味でのバンパイアだ。それは不当な手段で蘇つた死者たちのことだ。クラスの高いほど強敵だ」これだけ説明すればわかるだろう。

「吸血鬼じゃないのか」普通バンパイアと言えば。

「別に血は吸わない。蚊じゃない」おしほりで、ミコタリージャケットについた返り血をふき取りながらアニーナ。おしほりが黒く染まる。奴らの血は黒い。

「あんな奴がいつぱいいるのか」

「数はそんなにいない。人間社会にまぎれている」

「あんなことがしょっちゅうあるのか」

「そうだな……。家業だから」

勘弁してくれ。ゲームセンターに行つてゾンビ撃つて満足してろ。本物相手にしてるゾンビねえ。十三歳の小娘が。

まあ、いい。こいつとはっこでお別れだ。お仕事ご苦労様。これからグレイトフルデッドに行つてみんなと合流して……。

ガンジヤは!? 僕のガンジヤは何処だ!?

祐一はジャケットを裏返して全てのポケットをひっくり返した。

「がない!」

俺のガンジヤはつ!? 何処にもないつ!?

「どうした。何をやつている? アニーナが聞いた。

「ガンジャがなーんだよ。わざ買つたガンジャが
「そーか」さつきの騒動で落としてきたのだろう。「それは氣の毒
だ」

「氣の毒で済まないんだよ。殺されるよ、俺。新宿には歸りれなく
なる」

仲間の大麻を全て無くしたとあつては。やばい奴だつていっぱい
いるんだ。

「正直に話してみればどうだ」

「話せるかよつ……」誰が信じるンだ。うまい嘘をついたほうがも
つとマジだ。しかしどんな嘘をついたつて、良くて軟禁、悪くて監
禁……リンチ確實……運が悪けりや……。

逃げるしかねえじやねえかよお……

「來い。早くここを出よ。こんな明るい店に居て見つかつたら最
後だ」

こうなつたのも半分以上、いや、全てこいつの責任だ。

「一緒に逃げて、もし捕まつたらお前の口から俺の無実を証明して
もらひつ」

「それはかまわないけれど。……なんだつたら今から一緒に行って
話してやろうか?」

「いへら第二第三者の口から聞いたつて信憑性ゼロなんだよ……。だか
ら逃げるンだ。説明は最悪の場合の手段だ。

祐一はおつとつとかまえたアニナをせきたてて店を出た。

シーン10～12

シーン10 地下駐車場

「警部。他に灰にまみれた浮浪者の服が五人分見つかりました」

「ふーん」

とりあえず、動いていたから、一人の男は救急車で搬送した。が、どう見たってありやあ、死んでいる。死体袋のほうがお似合いだ。検死官を気絶させないために救急車に放り込んだんだ。医者が気絶したって知るもんか。検死官は身内だ。

それから、この大麻。ざつと一百グラムくらいか。頭が混乱する。「いつたい、何があつたンだろ?」
若い刑事は肩をすくめた。

「他に遺留品は？」

「後は……薬莢くらいスね」

壯年の警部樋崎はため息をついた。

「この事件は、状況を全部書類にまとめたらエックスファイル送りだ」

「え、あるンですか?」そんなものが本当に。

「冗談だ」だが、その類の事件だ。

シーン11 ホテル

「なに? お前こんなところに泊まってるのか」

「リザーブしてある。今からチヒックインする」

超高層ホテルのロビーである。

「お前つて金持ち?」

「イリアは爵位だ」

「こともなげに言つと、フロントで手続きを済ませ、ボーイに案内させる。

祐一はふかふかのカーペットに驚いていた。

エレベーターの到着先は最上階近い。ロイヤルスイートではないが、充分上等な部屋へ案内された。広いリビングの奥にベッドルーム。北欧製と思われるソファと重厚なカーテン。

「うひょー」祐一はさらにふかふかのカーペットに驚き、ジャンプしてその感触を確かめた。本当なら今夜は高架下でコンクリの上に寝なきやいけない身の上だ。

アニナはぐるりと部屋を見て回った。一部屋あるし、調度品や家具も彼女好みだ。

しかし、やはりここも同じだ。息苦しい。今まで、日本のどんな場所へ行つても、窓は密閉されていた。窓を開けることができないからどことなく息苦しさを感じる。日本人は慣れているのだろうか。この部屋にも壁一面を覆うカーテンがかかっている。その奥には密閉された窓があるに違いない。

祐一が分厚いそのカーテンの横にある紐に気づいた。彼女は今日着いたばかりだと言つた。だつたらこれはまだ見ていない筈だ。ルーマニアがどんな田舎か知らないが、こんな光景ははじめての筈だ。いたずらっぽい笑みを浮かべると

「アニナ」と声をかけ、紐を思い切り引つ張つた。

「東京へ、ようこそ」カーテンが開け放たれ夜景が窓外に広がつた。巨大なビル群。広がる光の洪水。

アニナは目を瞠つた。こんな美しい光景は見たことがない。光の平原が何処までも、何処までも、地平までも続いている。

「星が、降りてきたようだ……」

祖国の星空を思う。古城の夜を、森を思う。まったく対照的な眼前の風景。これらがシステムであることが信じられなかつた。全ての光の下に人間が居て、それぞれの人生を送つていることが。だから、美しいだけではない。闇もある。この風景のどこかに渕上もいるのだ。

何処に居ようと必ず倒してやる。

指でピストルをつくり、狙い定め、バンと呴いた。

「コウ。黒龍会に渕上がいるかどうか……調べられるか」

浮かれ気分だった祐二が真顔に戻る。

「そりやあ……。どうかな」知り合いの組関係者が何人かい。そういう情報に聴い不良仲間もいる。わかるかも知れないし、わからぬかも知れない。ただ、その男についてもつと詳しく知つておく必要がある。

「渕上つて奴のこと、知つてること全部教えてくれ」それ次第だ。アニナはソファに深く身を沈めた。

「生前、渕上は黒龍会に所属していた。もし、日本に潜伏するなら、必ずその庇護下にある筈」

「生前！？ 生前てのは穩やかな単語じやない。

「その、渕上つてのもバンパイア……？」もしかして。

「そうだ。それに強い。多分、かなり高位だと思う。父が殺された。父は日本へ向かう奴を追つていて、口スで殺された。……このジャケットは父が着ていたものだ。それから」ポケットからジップを取り出して、

「このライターも父の形見だ」そう言つて大き過ぎの男物のミリタリージャケットを脱いだ。皮製のそのジャケットはよく見ると銃弾の跡と思われる穴がいくつか空いている。そして至る所に残る黒い血の染み。

「お前の父さん、でかかったんだなあ……」確かに、そのジャケットは大きい。アニナが着ればコートのよつだ。袖をまくつて着ている。そうしないと指先が出ない。

「渕上の年は三十幾つか。だが、今は多分二十そこそこに見えるだろ？ エルゼルという組織知つてる？」

「いや」

「当然。けれどフリー・メイソンは聞いたことがあると思つ」

「あるけど」

「フリー・メイソン、イルミナティ。政治的にも経済的にも世界を牛耳っている秘密結社。その目的は地上を悪魔のモノとすること。馬

鹿げていると思うかもしれないけれど、彼らは本気よ。そしてエルゼルはそのなかでも最も尖鋭的なグループ。恐ろしい悪魔召還の儀式を何度も繰り返している。もつとも、成功したことはないみたいだけれど。彼らにできるのは死者を蘇らせる術くらい。そう。渕上も彼らの手でバンパイアとなつた

「と、すると、どういうことになる?」

「黒龍会は大きな組織だけれど、例に漏れず日本最大の非合法組織長州会の傘下に入っている。そして長州会はフリーメイソンの息がかかつっている。黒龍会とエルゼルに何らかのつながりがあると考えるのが普通」

「そりが……。じゃあ、やつぱり渕上という男は黒龍会にいるんだろ?」など、と言つて祐一は続けた。

「黒龍会と言つても事務所はいくつもあるし、傘下の暴力団まで含めたら何処にいるのか、さっぱりだな」

「それを調べるにはどうしたらいい?」

祐一はにやりと笑つて言つた。

「任しどけよ。そういう仕事なら俺の分野だ」裏の情報網なり。とりあえず、明日の夜。明日の夜まで待たなければならない。情報を持つた人間が出歩くのは夜だ。

祐一は大きく伸びをすると言つた。
「今日はもう寝よう」そして部屋を見回した。奥に寝室があるがベッドはひとつだけのようだ。

「俺はソファで寝るからいよ」

「それは助かる」アニナがほつとした口調で言つた。

なんだ。少しは意識してたんだな、と思った。男勝りの小娘だと思つていたけれど。可愛いところもあるじゃん。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみ」

アニナは寝室に入った。間接照明の灯りを調整した。体を締め付けていたホルスターを外す。倒れこむようにしてベッドに横になつ

た。父のジャケットを肩からかぶつた。Jのジャケットを着ていると父に守られているような気がする。

「パパ……」小さく呟く。故郷の山々を、子供のころの思い出を脳裏に描こうとする。が、一分と経たないうちに寝息を立て始めた。充分すぎるほど疲れている。異国に来て、ガイドブックを頼りに街をさまよい、バンパイアも倒した。それも七体も。表には出さないが緊張の連続だったのだ。疲れて当然だ。

一方、リビングの祐一はなかなか寝付けなかつた。確かにさつきまでは動転していたが、こうして落ちついてみても、この先どうなるのかさっぱり分からぬ。とりあえずハッキリしてこることは、渉上つて奴を捜せばいいことだ。

調子の良い彼は、都合の良い所だけピックアップして考えることにした。もし、ガンジャを落としていなくて、寝室で寝ている女子もバンパイアなんかとは無縁だつたら、今夜はスペシャルラッキーな夜だ。見ろよ、この夜景。ドンペリでも頬みたい気分だ。飲んだことはないが。それにしても本当に、可愛い子なんだけど。バンパイアなんかと無縁だつたらね……。

シーン12 朝

早朝、目が覚めた。時差の影響だろうか。頭がぼんやりしている。きのう、光の洪水だつた窓外はどこまでも続く灰色のビル群と化していた。夢から覚めたような気分だ。祐一はまだ寝ている。アニナは、この間にシャワーを浴びた。真新しいタンクトップを着て迷彩パンツをはく。ベッドに腰かけ裸足のまま銃の手入れをした。

昼近くなつて、祐一は田を覚ました。むくりと起き上がると、不思議そうにあたりを見回した。田が合つと、日本語で何かポソリと言つて、照れたような顔を見せた。

「何て言つたんだ？」

「日本語でおはようつて言つたんだよ」

「ふーん」

アニーナは受話器を上げると、ルームサービスでサンドウィッチを二人分と新聞を頼んだ。

運ばれてきた新聞をアニーナは祐一に渡した。

「コウ。読んで」日本語のニュースペーパーだ。

祐一が広げた新聞を、アニーナが横から食い入るように見た。

記事は小さかった。

「あつたよ。これだ」祐一は要点を読んで聞かせた。

見出しへ『地下駐車場に浮浪者の変死体』。内容は、銃声がしたと住民から通報があり、警察は**町の地下駐車場でホームレスらしき男一人の遺体を発見した。と、簡単。それ以上の情報はない。銃声がかなり激しかったことを語る住民もいたが、突っ込んだ記事はなかつた。

「警察も伏せてるね」祐一は言った。考えてみても動いている死体なんて、発表できない。どう処分したんだろう？

「いつもはどうなの？」アニーナに聞いた。警察沙汰になつても公にはならないのか？

「シルバニアなら問題ないわ。わたしは外国で仕事をするのは初めてだから……わからない」これまでパパがやつていた。

どつちにしろ、警察ではこれ以上解決できない問題だ。それでも捜査はしているだろう。目撃者くらいいるかも知れない。祐一は立ち上がつた。

「じゃあ、俺は出かけてくる。夜中まで戻らないと思つ。お前は今日一日休んでる。俺独りで行く。お前を連れてうるさくなると田立つから」

「どういう意味」いきり立つアニーナ。柳眉を逆立てる。

「あのな」祐一はいきめるような口調で、けれど少し照れてこう言った。

「お前は田立ちすぎるんだ。人田をひくんだよ。男っぽい格好していくも……その、チャーミングってことだよ」

アニーナは唇尖らせて黙りこんだ。頬が少し染まる。

「じゃあ、行ってくる。朗報を期待してくれ
祐一は笑顔でそう言つと部屋を出た。

シーン13～14

シーン13 繁華街

夕刻、祐一は東京有数の繁華街に姿を現した。

さてと、まずは幸雄ちゃんだな。幼馴染の携帯に電話を入れた。
黒龍会ではないが、非合法組織の構成員になっている。一番下つ端
のペーページや有力情報は期待できないが。

「おう、祐一？」どうした」電話に出た相手は、どことなく態度が
でかい。思わず苦い笑みが出るが、聞きたいことが聞けるのならか
まわない。

「なあ。幸雄ちゃん、黒龍会に渕上って人がいるかどうか分かる？」
「渕上い？」さあ、わかんないな。そいつがどうしたんだ？」

「いやあ、ちょっと搜しててさ」

「知らないなあ……。黒龍会最近どうなつてんの？」逆に聞かれた。
「えつ？」

「最近、あそこ変なんだよ。変な外人が出入りしているみたいだし
エルゼルだ。直感した。

「そうなんだ」

「分かつたら電話してやるよ。誰だっけ？」

「渕上」「渕上ね。はいはい」そう言つて通話終了。一発目から未
確認有力情報ゲットだ。幸先良い。

次は知り合いの組関係者だ。さすがに携帯は知らない。事務所に
電話した。

「ちわス。ご苦労様です。祐一と言いますが、健さんお願ひできま
すか」姓で呼ぶのが礼儀だろうが、通り名しか知らないのだから仕
方ない。

しばらく待たされて相手は出た。

「おう、運が良かつたな。今出るトコだつたんだ。どうした。なん
か用か」

「ええ、ちょっと人を捜してまして。健さんだつたらご存知じゃないかと思ったンで……。黒龍会の渕上つて人なんすけど」

「そいつがどうした?」

「いや、捜してるんですけど」

「こら、素人が変なトコに首突つ込むンじゃねえぞ」一喝された。

「スマセン」やっぱ、そう言われると思った。

「もう切るぞ」ガチャン、切られた。

他の知り合いもおおむね同じ。組関係者から情報を得るのは無理なようだ。俄然、道は険しくなった。

祐一は繁華街の溜まり場に向かった。そこは家出少年少女が夜毎集う場所。昔つるんでいた仲間の溜まり場である。

「あれ? 祐一ちゃん。久しぶりだなあ」

ゲームセンター前。派手な車が並んで、一方通行の通りは渋滞している。

「最近ずっとこもってたからね。相変わらず、ここに居るんだね」

集まっていた連中と話す。

みんな、約束があつてここに来るわけではない。用があつてここに来るわけではない。ただ、ここに来て仲間が来るのを待つて、何か起ころのを待っている。

ガンジャの話を既に知っている者がいた。

「お前、ガンジャばくつたンだつて? やばいじゃん」

「なんだよ、その話、もう知つてんの?」

「お前、ジャンキーグループから指名手配されてっぞ」

「やべえ。なあ。ほら。新聞見た? 浮浪者の殺人事件。あそこで取引したンだよ。その後事件に巻き込まれちゃつてさ。必死で逃げて、気がついたら落としてたンだ」ここで、一生懸命言い訳して、伝わるのを待とう。甘いかも知れないが。

「お前、あの事件見たの?」

「やっぱ撃たれたの? あれ」「ねえ、ねえ。何の事件?」

俄然人が集まる。祐一は適当にこまかした。

「撃たれたよ。でも、俺もあせってたから、何があつたかよくわからんない。撃つた人間も見てないんだ」

「へえ。そなうなんだ。と言いつつも、殺人事件の目撃者として、しばらくもてはやされる。これではイケナイ。聞かねば。

「ねえ。最近、黒龍会で何か変わった話ない?」

「黒龍会……? わあ……」

「最近、ほら、あの気持ち悪い外人集団。あれ、黒龍会じゃない?」

「多分、それだよ。見たの?」

「時々、見かけるけど……」

「なんか、不気味なのよね。いつも一緒にいる日本人の人も「日本人。渕上かもしねり」。

「あいつらさあ。ほら。新宿の**通りにある雑居ビル。あそこの中地下につぶれたテナントがあるンだけど、よくそこに入っていくんだよ。何やつてんだろ?」

「そう、そう。わたしも見たことある」

やつた。やあっぱり、こいつら情報の宝庫だ。

祐一はそれからもそこで粘つた。時間帯が違えば、集まる人間も違う。誰に聞いても、今のような話が聞けた。しかし、渕上について聞いても、知っている人間はいなかつた。

携帯に着信。知らない携帯番号から。出てみると相手は健さんだつた。

「おう、祐一。あんまりぐだらん事で、事務所に電話かけてくるなや」

「すいませんでした……」

「黒龍会の渕上なあ。黒竜の親父さんトコに密分でおつた奴が、確か渕上や言いよつたなあ」

「あ、ありがとうござります」

「ああ。ほんと、今は事務所任されて、何やけつたいな外人とつるんどるわ。まあ、俺の知つとるンは、それぐらいや」

「ありがとうございます。助かりました」

「おう。いいか。じゃ、切るぞ」

さすがは極道だ。確かに考えてみれば、事務所に電話しても、俺みたいな若造相手に電話口でペチャクチャ聞かれるままに教えるはずがない。たとえ話したって差し支えない内容でも。そんな口の軽い極道はいない。だけど、後から、こつして教えてくれた。優しいトコあるンだよな。

さて、アニナ。パパの仇を討たせてやる。渕上の奴をぶっ殺そうぜ。黒龍会の事務所なら、俺も三つくらい知っている。そのどれかだ。そこに居なけりや、組長の自宅だ。まずは雑居ビルの地下で、渕上とエルゼルの奴らが何をやつてるか探りを入れてからでもいい。ホテルに戻ったとき、午前三時を過ぎていた。もう、寝てるに違いないから、こりゃあ、ロックドアウトだな、と思ってロビーに入ると、ソファに座っていた。彼の姿を見て立ち上がる。寝ずに待つていたらしく目が少し赤い。

「心配した」そう言った。

「ごめん。思わずそう答えた。連れ立つてエレベーターへ向かう。でも、いい知らせだ。ほほ、分かつたぜ。

シーン14 ホテル

翌朝、二人とも午前七時には目を覚ました。祐一がホテルの前のバーガー・ショップでモーニング・セットを買ってきた。で、それを食べながら情報を整理しようという話になつたのだが、アニナが露骨に眉をひそめた。

「なに？」この臭いハンバーガーの包みを開いて。

「え、なんか臭うか？」食べなれている祐一は感じない。

アニナは、一口食べて下に置いた。

「とても食べれない。なんなの。このお店

「え、なんなのって、お前の国、ミックないの？」

「ない」

日本人は、こんな物を食べているのか？ セットのソーセージに

も手を出してみたが、もつとまづかつた。どうしたらこんなにまづくなるんだろう。ただのソーセージが。

結局、アニーナが食べたのはポテトだけだった。

「残すンなら、俺がもううな」祐一がアニーナの分まで残らずたいらげた。

驚嘆の目で見るアニーナ。よく、こんな物を平氣で……いや、世界には昆虫類を食べる人々もいる。ただの食文化の違いなんだ。「とりあえず、分かつたことは、渕上は帰国当初黒龍会の組長の自宅に寄分として身を寄せていた

「キヤクブンつて」

「まあ、大事なお客様つてトコかな」

「で、その後事務所をひとつ借り受け、おそらくエルゼルと思われる外国人達となにやら画策している。奴らが出入りしているという、雑居ビルの地下テナントを調べてみれば、はつきり分かるかもしない」

「そうね。じゃあ、そこから調べてみる?」

返事がないので、祐一の顔を見た。目を見れば合意したことが分かった。

「侵入は今日の夜だ。まずは俺一人で下見に行つて来る」「今から?」

「勿論」

祐一は立ち上がった。パン屑を払う。

「見て来るだけだから、心配ない」

侵入は今日の夜。人がいなければ即。人がいれば、いなくなるのを待つて中に入る。鍵の種類を見ておきたい。シリンドラー錠ならなんとかなる。黒龍会の事務所を張り込んで、どの事務所にエルゼルと渕上がいるか特定したい。ひとりのほうが都合がいい。

祐一はアニーナに見送られ部屋を出た。

ひとり、部屋に取り残されたアニーナは落ち着かなかつた。昨日といい今日といい、祐一に任せっきりだ。彼を信用していないわけで

はない。信用している。信頼していると言つてもいい。彼女が日本語を話せない以上、探偵は彼に頼るしかない。

誤算だつた。日本人がここまで英語を話せないとは知らなかつた。ガイドブックには、大抵の日本人は大学卒業までに八年間英語を勉強する、と書いてある。それを読めば、まさか英語が話せないとは思わない。

しかし彼女も、日本語をまったく勉強してこなかつたわけではない。せめて駅で迷子にならないよう、日本語の読み方を憶えてきた。地名さえ読めれば地図や案内図を頼りに行けるからだ。しかし、やられた。地名の表記は全て中国語だつた。何故だ！…と唇を噛んだ。彼女に読める五十五音はまったくなかつた。

まったくチンパンカンパンな国だ。

窓の大都市に目を向ける。

灰色だ。何もかも、目に映る世界が地平まで灰色だ。陽射しを浴びても。これが日本の色だ、と思った。白でも黒でもない、灰色。やがて、灰色の世界が朱に染まり始める。沈みかけた太陽の照り返しを受けて高層ビル群の窓硝子が輝く。幾本もの塔が、こちらに向かつて輝いているようだ。やがて見事な夕景は幕を閉じ、青みがかつた世界がしばらく続く。海の底のような静寂が喧騒の奥に聴こえる。だが、やがて闇が全てを包み込みはじめ、街は灯りを点ける。一転して鮮やかな世界が浮き上がる。夜の底に。星の大平原が続く。アニナはずつと飽きもせず、その光景を見続けていた。ノックの音。祐一だつた。

「大収穫、つて言えるのかな。新宿に奴らの事務所はある。それから雑居ビルの空テナントはシリンドー錠だから、ピッキングを入れる」

アニナは軽い笑みを浮かべた。ありがとう、ユウ。
「行きましょう。用意はできてるわ」

シーン15～16

シーン15　張り込み

老朽化した雑居ビル。場末のそのビルはテナントの半数が空っぽだ。残っているテナントは、細々と営業を続ける小さなスナックやバーなど。人通りも少なく、悪魔崇拜者が策動するには丁度良い塩梅の場所。

地下にテナントはひとつ。もとは大きなラウンジかパブだったようだ。歩きながら祐一はアーナに説明する。奴らは六時きっかりに中へ入つて行つた。多分、まだいる筈。そこに路上駐車してある黒いセダンがそうだ。日本人が一人いた。多分、渕上。

「どうする？」ビルの手前で足を止めアーナは聞いた。どこで張り込めばいい。

「そうだな」祐一はしばらく考えた。丁度良い喫茶店もない。

「堂々としていよう」祐一はとなりのビルのエントランスに座り込んだ。手の缶ジューースを飲み干し、空いた缶を口にくわえた。

「このスタイルは、誰がどう見ても家出少年のシンナー中毒者だ」アーナに説明し、真似をするよつ言つた。

「じつやるのか？」空き缶のへりを歯で噛みくわえた。

「そうそう」指南しながら思わず笑いが出る。

「イリアアテ爵位だったよね」

「そうだ」

「てことは貴族なんだ」

「そうだ」アーナも愉快そうだ。こんな遠い異国之地で、シンナーを吸う真似するなんて。そもそも、シンナーを吸う人間を見たことがない。

祐一も金髪のこんな可愛い外国人少女のシンナー中毒者は見たことがない。しかもこの子は、本国ではお城に住んでいる、まあ言い様によつては深窓の令嬢だ。

「こんな真似させてごめん」そう言つしかない。

「いや、それはこっちのセリフだ。つき合わせて悪いと思う」眞面目な顔を作り答えるアニナ。そう言えば、と続けて、

「ユウはジャンキーだったな。ドラッグが切れて大丈夫なのか？」と聞いた。

祐一は軽く笑みを浮かべ答えた。

「ガンジャしかやつてなかつたから。禁断症状とか出ないよ。だけど、ガンジャに常習性がないつてのは嘘だな。もの凄く吸いたい。煙草ほどの害もないつてのも嘘だ。タールの量は半端じゃない。それにアル中のように厄介じやないつてのも嘘だ。自我崩壊してディープな世界に行つちゃつた人を知つていて。廃人同然だね」

ふーん、そうなんだ。とアニナは答えた。どんな凄い能力を持つても、十三歳の少女であることには変わりない。知らない世界には興味深げだ。

「廃人になるとどんな風なの」

「生きている人間の入れ物だね。多分、なかではもの凄いことになつているんだろうけど、外から見る限りじゃ、生きてない。としか思えない」

「生きてない？ そうなの？」

「そう。『ミニユニケーション不可能だから』一言もしゃべらないし祐一はそんな人間を数人見た。勿論、その人間は大麻だけでなくLSDやヘロインもやつていたのかも知れない。そこははつきり分からぬ。けれど大麻が、世間一般が思つているほど無害であるとは思つていね。高校生や中学生のやつていいものではない。自分を棚に上げているが、その辺の危険認識はしている。

時刻は十二時をまわり、そろそろ一時にならうかという頃。隣りのビルの地下から、人影が現れた。二人の外国人と、一人の日本人。

二人の間に緊張が走る。アニナはそつちを見ないようにして、目の端でその日本人を見た。長身で黒いスーツを着ていて、長く後ろ

で結んだ髪にサングラス。それくらいしか見て取れなかつた。まあ、いい。もうじき、たつぱり会える。

三人の男達は、黒いセダンに乗り込むと、闇の向こうへ走り去つた。

祐一とアナは顔を見合させた。ゴー・サイン。
すばやく隣のビルの階段を駆け下りた。

アナが階段上をうかがう後ろで、祐一は皮のウォレットを開いた。それは財布ではなく開くとピッキングの道具が並んでいる。太さの違う棒、先の曲がった棒。どれも細いそれらの棒から、一本を選び鍵穴に差し込む。実は初めてだ。

大丈夫だ。自分に言い聞かせる。時間は充分ある。人が来る心配もない。落ちついてゆっくりやればいい。シリンドラー錠のやり方は友達から今までに何度も聞いている。やって出来ないことはない。

「どう? ゴウ」ふりかえらずアナが聞く。

「うん。ちょっと暗い。懐中電灯で手元を照らしてくれ」
アナは懐中電灯を出した。鍵穴に向けて照らす。もし、祐一がやつても駄目だったら、拳銃でぶち壊す。そう思つたときだった。力チヤ。

乾いた音をたてて鍵が開いた。

祐一が得意げな顔をしてみせた。

シーン16 地下室

アナは、オーダー材の重たい扉をゆっくりと開き、奥に広がる闇のなかへ一步踏み出した。懐中電灯でなかを照らす。走る懐中電灯の光でさえも、その部屋の異常性が見て取れた。

床にあるのはおどろおどろしい赤い文字。整然と並べられた猫の首とカラスの首。

「ユウ、ライトのスイッチは何処

「今、搜している」入り口脇を照らして調べる祐一。あつた、これだとスイッチを入れた。その瞬間、一人は息を飲んだ。

もとはラウンジが何かだつたのだろうか。だが、ソファやテーブルは全て取り払われ一切無い。だだつ広いがらんどうの空間が広がつてゐる。カーペットも壁紙もはがされて、むき出しのコンクリの床と壁には恐ろしげなシミが文様を描いてゐる。

おびただしい数のろうそく。祭壇らしきものがあり、赤い血を満たしたグラスがふたつ。床には赤い魔法円。それを取り囲むように整然と並べられた猫とカラスの首。耳を澄ませば地獄の悪鬼のうめき声が地の底から聞こえてくる。

うひやあ。こりや、マジでやばい。祐一は及び腰になつた。この部屋の主は気が狂つているとしか思えない。しかしアニナの様子を見れば、怯むことなく敢然と立ち、無言で部屋の細かいところまで目を走らせてゐる。

「アモンね」唐突に言われて戸惑つた。

「魔法円の中のアルファベットを見て。AMONと書いてあるわ」

そう言われたが、祐一にはそれがアルファベットには見えない。奇妙な書体の不気味な文字。アニナも、父に言られてしぶしぶ読んだグリモアの知識が無ければ、分からなかつただろう。素直に父に感謝した。ソロモンの七十一靈くらい知つておかなければならぬのだ。デーモンをあらわすアルファベットも。

「アモンって、あのデビルマンの勇者アモンか？」

「何？ それ」そりや、そうだ。アニナに日本のテレビアニメの話をしても意味が通じるわけがない。

「日本の昔の漫画のヒーローだ」と説明した。すると、ヒーローなんてとんでもないと答えが返つてきた。

「アモンはソロモン七十一靈に名を連ねる悪魔で、地獄の公爵にあたる。古典的には巨大な鳥の頭を持つ姿で現れるといつ。コラン・ド・ブランシーの地獄図鑑には狼の体に腰から後ろは蛇の姿のイラストが描かれているわ」

そりやあ、随分とイメージが違つた。アモンがそんな格好じやあ、がっかりだ。漫画家つてのは嘘つきなんだな。……今、そんなこと

はどうでもいい。

「つまり、アモンといつ悪魔を召還しようとしているの」奴らは。

「そうか。黒龍会を隠れ蓑に」

暴力団が悪魔を召還しようとしているなんて、馬鹿らしくて誰も考えないだろう。黒龍会自体が、「レにどれほど関わっているか疑わしい。多分、組長も知らないんじゃねえか。エルゼルと渕上に、うまく利用されていとしか思えない。極道つて奴はシノギえたつぶりあげてりや可愛がられるもんな。

「で、どうなんだろう。うまくいったのかな」

「何が? 召還?」

「そう。それ」

「人間が悪魔を召還できるわけないわ。それは簡単じやない筈。死者である渕上を司祭にしても、容易く悪魔が召還できるのなら、人類はとっくに滅んでいるわ」

なるほど。そういうモノなのか。

「問題は、その方法ね。ねえ。新宿では人が行方不明になつても騒動にはならないの」

「え? そりゃあ、どうだろ? 一人や二人消えても誰も気づかないかも。実際のところ、故郷から『消えて』新宿に来た人間なんて腐るほどいるし……どうして?」

「あれよ」

アニナは、部屋の隅に堆く積まれた衣類と靴を指し言つた。祐一はそれを見て、アウシュュレッセで虐殺された人々の遺品の写真を連想した。いやな予感。

「まさか、生贊とか……」

「どうかしら。ねえ。部屋はここひとつだけだと思つ?」アニナは問い合わせ返した。

「どういつ意味だ?」

アニナは質問には答えず、しかし何か思い当たることがあるのか、隠し扉がないか探してみましょ、と言つた。

「隠し扉ねえ……」祐一は気持ち悪いのを堪えて、部屋の隅々を見てまわつた。

「ここだわ」アニナが言つた。思つたより簡単に見つかつたのは、犯人に隠す意図がまったく無かつたからか。

カウンターの奥に、四つんばいにならないと通れないくらいの小さな扉があつた。

二人は顔を見合させた。

祐一には、その扉を開けるのが躊躇われた。しかし、ここは男である自分が勇気を出して、最初に入るべきだ。と、手を伸ばしかけたとき、アニナがサッと扉を開いた。

とたんに鼻をつく異臭。そして、さつきから耳鳴りのように聞こえていた、地獄の亡者たちのうなり声、それが、はつきり聞こえた。なかは真っ暗だ。一筋の光も無い。

恐ろしいトンネル。祐一が躊躇つていると、アニナがさつと中に入った。

おい、ちょっと待てよ。祐一があわてて後を追う。

入つてみると、立つて歩けるほどの広さだった。懐中電灯で照らしてみると、コンクリの壁、ずっと奥まで続いている。電灯のスイッチらしきものは見当たらない。何しろ天井に照明器具らしきものが無い。

「進んでみる?」

「そうね」望ましくない回答だ。しかし、この場で他に選択肢はない。引き返すのが一番賢明だとは思うが、彼女が許すわけがない。

祐一はアニナの後ろについて進んだ。

唐突に、それは終わりをつけていた。突き当たりの壁。他には何もない。しかし、異臭はますますひどく、うめき声は悲鳴に近い。何も無いはずがないわ、アニナが呟いた。一人は懐中電灯の光で周囲を探る。そして、自分達の足の下に、マンホール状の鉄のふたを見つけた。

「なんだろう、コレ」

「開くかしら」

やつてみよう。祐一はふたに手をかけた。思つたほどの重みもなく、また何の仕掛けもなく、ふたは持ち上がつた。ガランガランと脇へ転がした。

田に刺さるような刺激臭と、地の底から沸きあがる「者」の声に、アーナと顔を見合わせ、懐中電灯を穴の中へ向けた。

「あつ！」一人は息を飲み、同時に懐中電灯を取り落とした。闇の中へ飲み込まれてゆく懐中電灯。それは穴の底に落ちると一瞬で飲み込まれ、一筋の明かりもなくなつた。真つ暗闇の中へ、二人は取り残された。そばには恐ろしい穴が口を開いたまま。

それは縦坑だつた。その底にはウジ。ウジの海。その中で何人の人の顔が、手が、足が、浮かんでは沈みを繰り返していた。人が口を開けばそこからも大量のウジが溢れ出る。恐ろしい悲鳴を上げ再び飲み込まれ沈んでいく。それが、懐中電灯の光に、一瞬だけ照らし出された世界。

なんだつ、コレはっ！ 思考は停止している。その言葉だけが頭のなかに鳴り響く。今見た光景が、悪夢の「ごとく幾度も脳裏に蘇る。

声を出せたのはアーナが先だつた。

「戻りましょう」

そ、そ、そ、そうだ。戻ろう。戻らなきや。祐一はゆっくりと穴があると思われる方向から後退つた。前後左右だけでなく、上下の感覚も怪しい暗闇のなかだ。間違えてあの穴の中に落ちたら……？ 考えるだけでもぞつとした。

「後ろつて、こつちだよな」アーナに聞いた。

「わたしもそうだと思う」闇のなか、すぐそばで声が返ってきた。ほんのわずか安心できた。

二人は這いながら、ゆっくりと慎重に引き返した。心のなかは焦つていて。走つて逃げたい。蓋を開けたままのあの穴から、悪夢のようなアレが溢れ出して、背後から迫つてくるのでは、と感じた。

そんなどはすはない、と思つても、恐怖に驚拘みされた心は悪夢を思
い描く。

ようやく、入り口の光が見えた。闇のなか、お互ひの輪郭がおぼ
ろに見える。祐二はアナの手をとつて立ち上がり、出口へ急いだ。
アナを先に出すと、自分も身をかがめて出て、扉をしっかりと閉
め、その場にへたり込んだ。

狂氣の様の店内が、この世に見える。アレは地獄の蓋だった。
「なんだつたンだ。アレは……」まだ、声が震えている。
アナにはわかっているらしい。大きく息をついて、言った。
「奴らは、生きている人間を媒体に、アモンを呼び降ろそうとして
いる。アレは、失敗して悪霊や餓鬼が取り付いた者達だ。死なず、
ウジに喰らわれるままになつていてる」

そのあと、しばらく、一人とも何も言えなかつた。

「つまり、奴らは……、新宿で人間をさらつてきては、薬で眠らせ
るかなにかして、この部屋でアモンをその体に憑依させよつとして
いる。そして、失敗して低級霊に取り付かれた人々を、片つ端から
あの穴の中へ捨てていてるんだ」

なんてこつた。……それじゃ、俺の顔見知りもあの中にいるかも
知れない。毎晩うろついていた女の子が、ある日突然姿を消したな
んてよくある話だ。家に帰つたんだろうくらいにしか、みんな思わ
ない。

「行こう。コウ。」を出よつ「残念だけど、わたしには何もでき
ない。

「渕上のいる事務所へ連れて行つて
これ以上、好きにはさせない。

シーン17～18

シーン17 黒龍会事務所

六階建ての小さなビル。テナントはスナックやバーばかり。最上階はオーナーズ・ルームだ。

その場所を突き止めるのは、祐一でも容易ではなかつた。外国人が出入りしている黒龍会の事務所を捜せばいい。最初は簡単に考えていた。が、彼の知つてゐる三つの事務所にその気配はなかつた。そして、困惑したときこのビルを思い出したのだ。

ここは黒龍会が汚い手を使つて手に入れたビル。転売する予定だらうが、元のオーナーは追い出され、最上階は空いている筈。ひとつしたらと思つて見にきたらビンゴだつた。黒いセダンが停まり、なから三人の外国人が現れエレベーターへ消えていつた。祐一はすばやく近寄り、エレベーターの停止した階を確認した。六階。ビンゴ。すぐに離れてさらに様子を見ていると、二人の外国人と一人の日本人が降りてきた。多分、アレが渕上。それから急ぎ先回りして、例の雑居ビル前で見張つていると、今見た黒いセダンが停まり、さつきの日本人と外人二人が地下へ入つて行つたのだ。だから、もう、間違いない。

説明を聞いてアーナは言つた。

「ありがとう。ユウ。ここから先はわたし一人で行く」

なかで撃ち合いになるのは確実だ。ここまで手伝つてもらつただけでも充分だ。これ以上、巻き込むわけにはいかない。死なせるわけにはいかない。

「そう……だな……」

祐一の思いは複雑だ。ここで引いては日本男児の名がすたる、などとは思はないが、この先ついていつても、足手まといになるのを目に見えている。彼女一人を行かせたくないが、自分は何の役にも立たない。

「表で待っているから」

エレベーターの前で言った。アーナは無言で微笑んだ。エレベーターの扉が閉まった。昇っていく。

階数表示が六階で停まるのを確認して、祐一は表に出た。電柱に寄りかかり、上を見上げる。

「ここでさよならなんて、無しだよな？」呟いた。

エレベーターを降りた。回廊があるが入り口はひとつだ。扉、右上に監視カメラがある。ポケットに手を突つ込み、ガムを噛みながら呼び鈴を押した。

さあ、早く出てきて頂戴。地球の裏側に逃げたってこうして見つけ出してやるわ。悪魔崇拜者とバンパイアは。

ドアノブがまわる。ガチャ。扉が開く。スローモーションに見える。

「お前。何の用だ」金髪の男が顔をのぞかせた。

その額に九ミリ弾を撃ち込んだ。深夜の繁華街に響き渡る銃声。挨拶はなしだ。両手に拳銃を持ち、倒れた男をまたいで中に入った。廊下。両サイドに扉。奥に扉。土足で踏み込んだ。

奥の扉が開き二人の男が出てきた。一発で倒した。人間の的には、彼女には簡単だ。左右の扉が同時に開いた。両腕をばつと広げ、気配に銃弾を撃ち込む。顔は正面を向いたまま。目の端で倒れる男の姿を確認する。

奥の扉に片手の銃を向けたまま、今開いた扉の奥を見る。普通の部屋。人の姿はない。足元に転がっている。エルゼルの人間を殺すことに躊躇いはない。主戦場は奥の部屋だ。

耳元の血管が大きく脈打つ。頭に血がのぼり、頬は紅潮し、眸はつりあがる。冷静ではない。突入だ。

倒れている男の襟首とベルトをつかみ、大きく振り子のように前に反動をつけ、部屋の中に投げ込んだ。

響き渡る銃声。数発の銃弾が飛んできて、投げ込まれた男の体を

撃ち抜いた。全て右方向から。

さあ、次はわたしの番だ。

両手に銃をかまえ、勢い良く助走をつけ、部屋の中へ躍りこんだ。床に手をつかない側転。着地と同時にさらに勢い良く床を蹴り、もう一回転。いつせいに轟く銃声。だが、敵は彼女の動きについてきていない。逆に、彼女の眸は回転しながらも、敵の姿を捉えていた。着地と同時に四発の銃弾を放つた。四人の男が倒れた。

リビングは広い。20平米はあるかも。大きな絵。熱帯魚の水槽。立派なマホガニーの机。その奥に座る長髪の日本人。いやらしい笑みを浮かべている。黒いスーツ姿、首に黒い石のペンダント。アナには、その石がなにか、すぐにわかった。

一瞥して見て取ると、応接セットのソファの陰に踊りこんだ。ソファが被弾する。残る男は五人。いや、四人。ひとりは人間じやない。

深夜の繁華街の喧騒の奥で、しかしあつきりと銃声が聞こえた。

祐一は不安な目をビルの上に向ける。

「大丈夫だよな……」そう呴いてみたものの、全然大丈夫な気はしなかつた。

この狭い通りは人通りが少ない。まばらな人影が暗闇のなかにある。それでも皆銃声に気付いたようだ。上を見上げている。携帯を取り出した奴もいる。

急げよ。すぐに警察が来る。

床に転がっているのは全て死体。

重厚なマホガニーの机をはさんで対峙するのは、銃をかまえた少女と長髪の死者。

「面白い。貴様、イリア・サロニケか？」死者渕上が口を開く。言葉とともに冷氣を吐く。

「渕上、サロニケの家名において貴様を倒す」深くかぶった帽子の

下から炯眼鋭く敵を見る。

「ふつふつふつ。子供をよこしたか。貴様、あの男の娘だな。俺に敵うと思うのか。あの男は為すすべなく殺されたぞ。貴様もなぶり殺してくれる。いや、生きたままウジに食らわせてやる。貴様の勇気をたたえ名前を聞いてやる。貴様の名は」渕上は饒舌だ。動搖させるつもりか。そんな手には乗らない。

「アニナ」短く答えた。

「では、アニナ。今日が貴様の最後の夜だ。たっぷりと後悔するがいい」

不敵な笑みを返す。

「最後の夜は貴様だ、渕上。父の仇、そして罪なき人々を地獄へ導いた報いを今受けよ。炎の湖で永遠に焼かれるがいい」

死人は高笑いした。悪魔の嘲笑。アニナはオートマティックの銃口を向けた。

しかし。

コンマ五秒後が見えた。

「貴様、避けないな」そう。彼女の目には、銃弾を浴びてびくともしない男の姿が見えた。

悪魔の冷笑。

「お前の父も、銃で俺が倒せると思つていた。親娘そろつて間抜けな奴らだ。父から何も聞いてないのか。さあ、撃つてみろ」

撃つてやる。お望みどおり。貴様が高位のバンパイアであることは百も承知だ。銃弾が効かないことくらい想定内だ。

彼女は撃つた。一発の銃弾は渕上の額に当たると皮下に飲み込まれた。跡に何の痕跡も残さず。続けて放つた四発の銃弾も渕上の体内に飲みこまれた。着弾の衝撃もない。渕上は不敵に立つたままだ。

「どうだ？ サロニケ。これが俺の力だ。どうやって俺を倒す」

渕上の指先が鉛色に変わり鋭くのびた。

糞つ。アニナは毒づくとミニ・ウージーに持ち替えた。

爪先鋭く襲い来た。紙一重でかわす。蹴りを放つ。

バンパイアは敏捷だ。放つたその蹴りを手刀で打ち払つた。体勢が崩れた。が、身をかがめその姿勢から後ろ回し蹴り。コンバットブーツが敵の背を打つた。が、びくともしない。余裕で振り返る。その振り返った顔へ銃持つた腕で肘うちをくらわせようとした。が、あごにヒットする寸前、渕上の手がその肘をとらえた。

「くつ」

ダンツ。壁まで吹つ飛ばされた。頭部を強く打つて床に倒れた。即座に立ち上がろうとしたが軽い脳震盪だ。くらくらする。

チカチカする視界にゆっくりとバンパイアが現れた。無抵抗の彼女の喉をつかみ壁に押し付け立たせる。鋭い爪に、首筋が切れ、血が流れた。

「サロニケも貴様で終わりだな」死人はふつと笑つた。

「サロニケに生まれた不運を地獄で嘆ぐがいい」

このまま鋭い爪で握りつぶせば彼女の首は落ちる。絶体絶命。弾を飲み込む。なら、窒息するがいい。

両手のミニ・ウージーを渕上の喉に押し当て引き金を引き続けた。銃弾がプスプスプスと喉に飲み込まれていく。同時に見る見る喉が膨らんでいく。全弾撃ちつくした時、渕上は「があ」とうなりその身をかがめた。その顎下は喉を膨らませた蛙のようになつている。アニナは素早く身を翻した。撤退だ。この隙に。悔しいが敵わない。

渕上はげぼげぼと銃弾を吐き出している。おみやげだ。高々と足をふりあげると、ブーツの踵を後頭部に叩き込んだ。その首にかけたペンドントを引き千切ると、ふりかえらず脱兎のごとく部屋を脱出した。非常階段を駆け下りる。遠くサイレンの音が聞こえる。

一階。柵を飛び越えた。野次馬が大勢いた。血まみれで飛び出してきた少女を驚きの目で見る。

「こつちだ」腕をつかまれた。祐一だ。

野次馬は何事が起こったのか、まだ理解できていない。サイレンが角を曲がった。ヘッドライトが、そして回転灯がくるくると現場

を照らしだす。

ふたりは脱兎のごとくその場を逃げ出した。すぐに細い路地に入る。そしてまた細い路地へ。暗い駐車場を突つ切る。柵を乗り越えまた細い路地へ。

全て道を知り尽くした祐一だから出来たことだ。

「ここを出れば大通りだ」人ごみに紛れ込もう。

「その前にTシャツを脱げ」人影のないビルのエントランスで祐一は言った。ジャケットの返り血はそれほど目立たない。夜のネオンライトでは。しかし白いTシャツにべつとりついた血糊は隠しようがない。祐一は自分のTシャツを脱ぎランニング姿になった。渡されたTシャツをアナは素早く着た。祐一はランニングの上にフィールドジャケットをはおつた。

「行こう」逃げ切れる。

まさか逃げ切れるとは祐一も思っていなかつた。ふたりは大通りへ出た。深夜というのに祭りのような人ごみの中に紛れ込んだ。

シーン18 大通り

すごい人の数だ。アナは吃驚していた。真夜中なのに。「祭りもあるのか

「毎晩こうだよ」祐一が答えた。これだけいれば、フェスティバルが出来る。アナは思った。もつたいい。ただうろつくだけなんて。

こんな雜踏のなかでは、祐一だつて見知った顔は少ない。油断していた。路駐しているバスがあつた。大型のキャンピングカーもどき。

前方にそれが見えたとき、祐一の顔が青ざめた。サッと血の気が引いて体が硬直する。踵を返して別の道へ行こうとしたとき、

「よう、祐一ちゃん。何処にいたんだよ」

「心配したぜえ。もっともお前じやなくてガンジヤのほうだけどな」ドレッドヘアと長髪のふたりの男に捕まつた。

「なんだ？ こいつらは？」 アニナが聞いた。勿論英語だ。

「ガンジヤグループだよ。マジやべえ。俺あ、良くてリンチだ」
「撃つていいのか？」 アニナがジャケットの内側に手をいた。

「馬鹿。いいわけないだろう」

「なにを英語でくつちやべつてる？」 男の一人が苛々して言った。

アニナは余裕の笑みを見せた。

「撃たなければいいわけだな」 寸隙、高々とふりあげた右足を、祐一をつかんでいる男の腕にぶち込んだ。

「なっ！」 と言った瞬間には三百六十度回転しての後ろ回し蹴りが男の顎にヒットした。男は吹っ飛んだ。もう、立てないみたいだ。あっけない。

もうひとりの男が後ろから羽交い絞めにした。もがき肘を腹にぶち込む。だが、すぐに彼女の体は開放された。祐一が落ちていた鉄パイプで男の頭を殴つたのだ。

「楽勝じゃないか」とはアニナ。

「ガンジヤとヘロイン漬けだからな」と祐一。既にその場には人ばかり。野次馬にぐるりと取り囲まれていた。

しかも。

祐一がふりかえった時、キャンピングカーからもくもくと煙を吐きながら十人近い男が現れた。

「やばい。逃げよう」

「大丈夫だ。勝てる」 悠長なことを言つてているアニナに、祐一は急いで説明した。

「そりや、奴らはガンジヤ漬けで体力もない。けど、奴らのバックにいる奴らが問題なんだ。手出しそれば、次から次へと現れる。たちが悪い。とても勝ち目はない」

「なんだ。随分と卑怯なんだな」 武士の国が聞いて呆れる。

「ああ、卑劣で陰湿で、ネット中坊と大差ない」

最後の説明はアニナにはよく理解できなかつたようだ。祐一は状況も状況ながらその説明を延々とした。

「生意氣で調子こいてる礼儀知らずの奴らだよ。匿名だからね。本性が出るよ。とこどん陰湿で卑劣で、どうせネットのなかだけしかでかい面できない奴らだ。知ってる大人は親と先公くらい。現実世界の人間関係も巧く構築できない奴が匿名世界にデビューするんだから、たまつたもんじゃないぜ」

祐一は過去よっぽど腹立たしい目にあつたのか延々まくしたてたが、そんな悠長に構えていられないようだ。既に取り囲まれている。なかのリーダー格が口を開いた。

「祐一ちゃん。ちょっとお話しよっや」口調は穏やかだが毒がある。この男は、棒有名暴力団の会長の妾腹の息子。やりたい放題の人生を歩んでいる。

「なんて言つたんだ？」アニナが通訳を求めた。

祐一は言葉の意味を正確に変換して伝えた。

「拉致、監禁して半殺しにするつて」

アニナがやりと笑つた。

「そうか。それはひどい。助けてやる」オートマティックを構えた。えっ！？ ちょっと待て！！

と、思つたときには今口を開いた男の肩を撃ちぬいていた。男がもんどりうつて倒れた。

その場の空気が殺氣だつた。いや、全員あつけにとられ目をみはつてゐる。

近くにいた間抜け面の男の顔面に後ろ回し蹴り。立て続けに隣りの男に中段後ろ蹴り。高々と足をふりあげ、かけ蹴り。一瞬で三人の男が地に倒れた。

やつと我に返つた男どもがいっせいに罵声激しく襲い来た。

アニナはふり返るとオートマティックを連射した。全弾足を撃ちぬいている。

「イテエ、イテエ」と転がる男達を尻目に祐一はアニナの手をとり逃げ出した。

パトカーのサイレンが近い。それでなくともこの辺に集結して

いるのだ。

衆人環視のこのなかで、こんな派手な撃ち合い、ではない、一方的な射撃をしたのだ。逃げ延びるのはさつきよりも格段に難しい。「クソ、どけ」スクランブル交差点。行く手を阻む野次馬に体当たりをくらわしながら雑踏のなかを突き進んだ。

半分以上パニック状態だが、祐一の頭は必死で退路を考えている。路地へ逃げ込め。ビルの敷地を通り抜ける。路地から路地へ。そして、何処に隠れる？ 廃ビルか？ 空きテナントか？ 地下鉄は駄目だ。暗がりでこそ目立たないが、アニナは血だらけだ。クソ。何処へ逃げたらいいんだ？

シーン19 隠れ家

「なんだ。ここが一番安全だつたな」今起こつた一連の出来事を、頭のなかで整理しなければならないが、とりあえずそれは後回し。一服したい。

場所はアニーナのホテル。何の問題もなく帰つてこれた。今までの出来事が別世界。セレブな空間に身を浸す。煙草をゆっくりふかし、大きく吐息をついた。

はあ……。全ての出来事が頭のなかに蘇つてきた。シンナーでも吸つて全てを忘れてえ……。

とりあえず今は安全だ。少なくとも今夜は。だが、今のうちに対策と次策を考えおかないと、ラッキーで逮捕。悪くて東京湾。最悪でバンパイアに殺される。

「整理して考えよう」アニーナが冷静に言つた。

「エルゼルの奴らは全員殺した。あそこにいた奴らは全て」

「渕上は」祐二が口を挟む。

「倒せなかつた。奴は銃が効かない。もつともそれくらい予想していたけれど。思つていた以上の強敵だつた」

「そうか……」

「逃げるのが精一杯だつた」

「警察はどうだらう。渕上を捕らえたかな」一抹の期待ともどれる祐二の言葉にアニーナは自嘲気味に笑みをうかべ答えた。

「そんな間抜けじやない。多分、警察が踏み込む前に逃げているはずだ」

「この件を整理しよう」祐二は言つた。

「まず、渕上を援護していいた連中はいなくなつた。もつとも、渕上にとつては痛くも痒くもないだらうけど、とりあえずあの場所で儀式は行えなくなつたわけだ」あのおそろしい召還儀式は。

「どうかしら。渕上一人でもやるかもしない。それはどっちともいえないわ。それより、今、何処に潜伏しているか。そっちのほうが問題ね」

「それは推理のしようがない」祐一はそう答えたが、黒龍会組長の自宅がちらりと頭に浮かんだ。以前客分でいたという。

「明日のニュースペーパーを待ちましよう。なにか警察がつかんでいるかもしれない。あの事務所から。例えば黒龍会と正体不明の外国人のつながりとか」

「どうだろう。祐一は懐疑的だ。発表するだろ？ 仮になにかつかんだとしても。警察も勿論そうだが、この国新聞は保守的だ。腰砕けと言つてもいい」

「次にあなたのお友達だけど」とアニナは愉快げに言つた。

「気の毒だけど、多分警察に逮捕されてるはずよ」

祐一も納得せざるを得なかつた。あいつらが大麻を持ってなかつたなんて考えられない。はじめは被害者として運ばれても、ポケットや車内から大麻がぞくぞく出でてくるはずだ。当分留置所暮らしだらう。

「出てきたら怖いけどね。俺は。お前が撃つた男、あいつは大きな組の会長の息子なんだ。妾腹だけどね。俺は、見つかったら殺される」

「大丈夫。祐一を殺させはしない」

目が合つた。一瞬の間。祐一は笑みを浮かべた。

「ありがとう。期待してるよ」

シーン20 黒龍会事務所

「『じゅじゅじゅじゅ』、一体何人転がってやがる？」壮年の刑事樺崎は部下に聞いた。

「十四人です。全て外国人男性。パスポート等は現在捜しているところです」

血にまみれた黒龍会事務所。

「殺されたのは全て白人男性で、国籍は今のところ不明です。それから、この事務所には日本人男性が一人いたようです。住民の目撃証言があります」

「日本人……？ そいつは逃げたのか？ それともいなかつたのか？」そもそも黒龍会が外人とつるんでなにをやつてやがつた？

「警部。玄関口に防犯カメラが取り付けて合つたのですが……」その警官は次の言葉を言いよどんだ。

「おお。どうした？ 犯人が写っていたか？」

「はい」小さな声で一応うなずく警官。

「見てみよう」

警官の案内で小部屋に入った。モニターがある。警官がスイッチを入れた。再生。

「なんだこりゃあ！！」

目に入ったのは小さな外国人少女だった。少年のように野球帽をかぶり、ダボダボのミリタリージャケットに身を包み、ボトムは砂漠色の迷彩パンツ。その少女が、扉を開けた大男の額に銃弾を撃ちこんだ。そして扉の中へ消えた。

「こんな子供がこの事件の犯人だというのか？」それは言われなくてもその場の誰もが感じている。

しかし、野次馬の証言と一致する。飛び出してきたのは血まみれの少女。誰もが口をそろえてそう言つていた。しかし、まさか犯人だとは思わなかつた。当たり前だろう？ ここは泣く子も黙る黒龍会の事務所だ。なにかの理由で拉致され、必死で逃げ出してきた被害者だと思つていた。

「一番[写]りのいいカットをプリントアウトしろ」 楠崎は言った。地取捜査だ。外国人少女だ。目立つ。きっと誰かが見ている。

シーン21 警察署

今日はまたまたクソ忙しいな。楠崎はぼやいた。今度は大麻不法所得だ。撃たれた奴は病院送りだが、怪我だけの奴の取調べが入つ

ている。まあ、もつとも、こいつらは全員麻薬Gメンの内偵が入つていていづれにしても逮捕寸前だつた。聞きたいことだけ聞いて後は奴らに引き渡せばいいだけだ。

聞きたいことつてのは勿論、奴らの麻薬取引先や売買ルートではなく、大立ち回りを演じた金髪少女のことだ。そして一緒にいた日本人少年だ。

シーン22 銃弾

「で、渕上はどうやって倒す?」聞いたのは祐一だ。しかし、アニナも答えを持たない。

「十字架は効かない。聖水も効かない。太陽を浴びても大丈夫。銃弾はきのう改めて効かないことを思い知らされた」

「銀の弾は」と祐一。

「迷信だ。そんなもの効かない」

祐一がため息をつき天を仰いだ。

「はあ。コレじゃバンパイアっていうより、無敵のモンスターだな」「その通りだ」

「今まではどうやって倒していた?」そう。彼女はバンパイアスレイヤーだ。今まで出会ったバンパイアはどうやって始末していたのか。

「これほど高位のバンパイアは初めてだ」そうでなければ父は殺されない。言外にそう言つた。

「はあ。万策つきたか……」祐一はまたもため息をつき、ポケットから煙草を取り出した。火をつけようとしてうまくいかない。ガスが切れている。

「ちえ。ガス切れだよ。あ、ジッポ持つてたよね。貸してくれる?」アニナが父の形見のジッポを大事に持つていたことを思い出した。受け取つたジッポはやけに重かつた。気のせいだと思い火をつけようとするが、やはりうまくいかない。

「駄目だ。これもガス切れだ」祐一はジッポをアニナに返そうとし

た。その時、カチンという音がした。普通そんな音はしない。

中が空洞で何か入っている?

祐一はアナの顔をまじまじと見た。アナも怪訝な顔をしている。

「気付かなかつたのか?」

なにを?

「これ、何か入つてゐるぜ」そう言つと祐一はジッポの中を抜き出した。通常綿花が詰められている部分に三発の銃弾。

顔を見合わせるふたり。

祐一は意味がわからないでいる。だけど、なにかの理由がある。アナは瞬時に理解した。これは普通の銃弾ではない。パパだ。渕上を倒すためにパパが遺してくれた。アナは立ち上がった。

「渕上を倒せる」

携帯を手に取る。電話した先はリチャード・ネルソン。
「リホルバーが欲しい」

シーン23 捜査一課

「少年の身元がわかつた。野原祐一。十六歳。奴ら大麻グループの使い走りの小僧だ。三日前、仲間の大麻を2百グラム持ち逃げしたそうだ。お前達は聞き込みにまわつてくれ」植崎は部下に命じた。その時、彼の携帯が鳴った。

「警部、目撃証言がありました。例の外国人少女と少年です」

「ホントか? 何処だ?」

「**通りのビルエントランスです。きのう深夜、ふたりでシンナーを吸つているところを見た人がいます」「はあ! ? シンナー! ?

どう考へてもつながらなかつた。黒龍会事務所に単身乗り込み十四人を殺害した驚くべき少女とシンナーが。

「とりあえず、そこへ行く。待機していくれ」携帯を切つた。

現場に向かいハンドルを握りながらふと気になつたことがあつた。

「二百グラムの大麻？」あの化け物がいた地下駐車場で見つかつた大麻も二百グラム。

なんだ？この事件は？つながるとは限らない。しかし刑事の勘が何かを示唆していた。

シーン24 死者の石

「渕上は何処にいると思う？」思案顔でアニナは言った。
奴の居場所を見つけなければ話にならない。

「さっぱり見当がつかない」祐一は答えたが、黒龍会組長の自宅が頭に浮かんだ。しかし言わなかつた。地球上でもつとも避けたい場所だ。口にすれば、当然殴りこみに行く。アニナなら。

ソファから立ち上がり、軽く笑みを浮かべるとアニナは言った。
「あるいはわたしを殺しに来るかも」意外なことを言い、窓外に目をやる。ありえないことではない。

「わたしはサロニケ。奴らの仇敵よ。このまま放つておくかしら？」
その可能性が低いことを祐一は祈つたが、その可能性は高い。

「このあと、奴のとる行動はみつつ」アニナの推測だ。

「一つ目は、懲りずにアモン召還を試み続ける」

「ふたつ目は、わたしを殺しにやってくる」

「三つ目は、黒龍会に逃げ込んだとしても、あんな大事件の張本人。黒龍会側もお荷物に感じるはずよ。早々に海外へ逃亡させる」「三番目が大賛成だ。海外へ逃亡して欲しい。祐一の思惑など何処吹く風、アニナは続けた。

「アモン召還は一番可能性低いわ。協力者なしに儀式は行えないし、それに無理に日本国内でやらなくても、逃亡先の海外でやればいいわ」

「じゃあ、ありがたい。このまま奴は海外へ高飛びだ」笑顔になつた祐一に、アニナはチャラリとペンドントをその手にぶらさげて見せた。あの時、逃げる間際、渕上の首から引き千切つた奴だ。

「なんだよ、それ？」銀の鎖に装飾のついた黒い石。「死者の石。バンパイアのペンドントと呼ばれるもの。身に着けたバンパイアの能力を高める効果がある石」そんな石があるとは驚きだ。しかも奪ってきたなんて。

「すぐに捨てよう」と祐一。出来れば日本海溝に。「駄目よ」とアーナ。

「わたしを殺して、これを取り返しに来るはずよ」「だからだよ、って言つても無駄か……。祐一は頭を抱え込んだ。いつ襲われても不思議でない状況じゃないか。

「これは滅多にあるものじゃないの。ゲームで言えばレアアイテムね。バンパイアというバンパイアは、皆喉から手が出るほどこれを欲しがつているの。ううん。バンパイアだけじゃないわ……」

はあ……。何処で買うんだ？ 魔法横町か？ で、杖とかフクロウも売つてんだ。ついでにバンパイアコロリみたいな殺虫剤は売つてないのか。

「渕上の居場所を捜しだして始末するか、渕上が襲つてくるのを待ち受けれるか。どっちがいいと思う？」
「聞くなよ。どっちだっていやだよ……。

シーン25～29

シーン25 隣のビル

櫛崎は車を降りた。場末の人通り少ない寂れたビル前。

なるほど。街中でシンナー遊びをするには丁度いい場所だ。

考えられる可能性はふたつ。ひとつ、シンナーをやっていた。もうひとつ、シンナーをやつてるふりをして誰かを待っていた。

その誰かがターゲットだったのか？ 後をつけ黒龍会事務所にかちこんだ？ 少年、野原祐一の役割はなんだつたんだ？ 黒龍会に殴りこんだのは少女ひとりだ。

車を降りた彼のもとに三人の部下が駆けつけた。

「聞き込みは無理だな」 彼は言った。今は昼間だ。どの店も扉を閉ざしている。

「周辺を捜索してみよう」

櫛崎は少女がいたというビルのエントランスに入つていった。地面に目を走らせる。何も無い。階段を上つた。どの店も閉まっている。このビルの構造は、全階回廊になつていて、どの階からもエントランスを見下ろすことが出来る。ターゲットはこのどこかにいたのか？ 柵に手をかけ一階から下を見下ろす。想像してみる。あそこ、エントランスで、夜の暗闇の中シンナー遊びをしている少年と少女。いや。暗闇ではない。エントランスはライトアップされる。違うぞ。ターゲットはこのビルじゃなかつた。そんな目立つ場所でターゲットを待ち受けるわけがない。ターゲットが店を出ればすぐ目に付く。

隣のビルだ。

階段を駆け下り、隣りのビルへ向かったとき、ある臭いに気付き足が止まつた。微かだが。なじみのあるその臭い。腐敗臭……。隣のビルの地下テナント、真つ暗な階段下を見た。

シーン26 フロント

アニナが逗留しているホテルのフロントに、若い刑事がやつてきて、防犯カメラに写った写真を見せた。

「この少女がこちらに泊まっていませんか？」
受け取ろうとした若いフロント係を制して、白髪の支配人が写真を手に取った。

しばし目を凝らし見た後、

「残念ですが当ホテルのお客様ではないようです」と答えた。

「そうですか」若い刑事は、少し落胆した色を見せ、協力ありがとうございましたと言うと帰つていった。

白髪の老人がその後姿を見送る。

彼らはローマ法王庁からの客なのだ。こんなことは今までにも何度もあったことだ。

シーン27 渕上

大音響とともに全面の窓ガラスが吹き飛んだ。欠片が宙を舞い散る。吹き込む強風。事態を把握できずに床に伏せるアニナと祐二。はためくカーテン。ふたりが顔を上げると。

そこに立っていたのは、黒いコートをはためかせた、蠱惑的な目の長髪の死者渕上。挑戦的な笑みを浮かべると一歩足を踏み出した。チャリ。ガラス片が音をたてる。

「死者の石を返してもらおう」そう言った。

まずい。オートマティックもMP-5もホルスター、「」とベッドルームだ。そばにあるのはショットガンだけ。アニナはショットガンに手をかけた。

「無駄だ」即座に死人は言った。^{じびと}

その通りだ。例の銃弾もリホルバーがなければ使えない。今は手も足も出ない。

「さあ。返してもらおう」

「嫌だと言つたら？」

「殺して奪うだけだ」

アニナはペンドントをポケットから出した。

バンパイアが近づいてくる。ガラス片踏みしめながら。すぐそばまで来ると、アニナの手から死者の石を奪い取った。そして言った。「決着をつけよう。今夜西戸崎埠頭の三番倉庫で待っている。黒龍会所有の倉庫だ。誰にも邪魔されない」「ふつ、と笑みを付け加えた。「望むところだわ」

アニナの返事を聞くと、再びふつと嘲りの笑みを浮かべ、ゆっくりと窓際へさがつた。

「待つている」

そう言うと、身を翻し窓の外へ飛び降りた。

あわてて下をのぞく祐一とアニナ。

バンパイアは駐車してあつた車のルーフを大破させて着地すると、驚く人々を尻目にそのまま駆け去つていった。

「なんだよ、アレ」ようやく口がきけるようになつた祐一。

「あんなの化け物ジヤン」「今更なにを言つてるのかしら、この人は。アニナは祐一を一瞥すると、窓際から離れた。

決戦の準備だ。サングラスをかけた。

シーン28 召還の部屋

老ビル入り口に一面ブルーシートがはられた。警察関係者以外誰も入れない。投光器が幾台も持ち込まれた。鑑識の人間が何人も入つた。

こんな恐ろしい現場は誰もがはじめてだった。

部屋の真ん中で櫛崎は呟いた。

「なんなんだ、ここは」

血の満たされたグラス、床の召還円、奇妙な記号、猫とからすの首。

それに絶え間なく聞こえる小さな音。地獄の亡者どものつめき声。

「警部」カウンターの影で警官が叫んだ。

「隠し扉と、その奥に通路のよつたものがあります」

シーン29 フロント

「窓ガラスが割れてしまった。すまない。支払いはわたしが……」
フロントでその顔申し出ると、白髪の老人は全て心得ている、といつた口調で、

「ローマ法王庁のほうへ請求書を送らせてもらいます。このようなケースではいつもそうしておりますので」と言つた。

それから大事そうに郵便物を取り出し、アニナに渡した。

「お荷物が届いております」

封筒だった。底が膨らんでいる。上から触つただけでコインロッカーのキーだとわかつた。リチャード・ナルソンからだ。

「ありがとう。待っていた」アニナは微笑み礼を言つと、ルームキーを渡し、

「今夜は多分帰らないと思う」と言つた。

「かしこまりました」老人の声を背に、駆けるような勢いで歩きはじめた。

「おい、ちょっと。待てってば」祐二があわてて後を追つ。
そのふたりの後姿に白髪の老人は呟いた。「ご武運を」

シーン30～31

シーン30 地獄のふた

誰もがその光景に我が目を疑つた。

「おい、大丈夫か？」下に向かつて投げられた場違いなその言葉は、職務意識から出たものだ。アレが何らかの犯罪被害者であれば救出せねばならない。とても、そうは見えないので。職務意識が田の前にある現実にフィルターをかけている。

後ろのほうにいる人間は状況が把握できない。順繰りに交替して穴の中をのぞいて行つては吐き気を堪えている。

縄梯子が下るされた。

「おい、自力で上がるか？」動いている以上相手は生きていると想定して声をかけている。

「警部、自分が降りていって救助します」若い警官が樋崎にそう言ったときだった。

幽鬼ながらの姿のそれが、縄梯子をしつかりとつかみのぼりはじめた。

やがて、その姿が明瞭になると、警官たちは、思わず後ずさりした。樋崎は必死で後ろにいる者たちに、下がれ、下がれ、と手で合図を送った。誰一人口をきけない。

警官たちが後ずさったその場所に、穴のふちに手をかけて、それが姿を現した。ゆっくりと、立ち上がろうとしている。

「ほほほほほ」と、口から大量のウジを吐き出した。顔を上げれば唇は腐り落ちており、歯茎と歯だけが残っている。くぼんだ眼窩の片方は、確実にウジが詰まっている。真っ白い生氣ない肌。細いがりがりの体。

誰一人、一言も発することができない。

ゆづくづく、近づいてくる。

体のところどころが破れ、そこからウジが流れ落ちている。

すり、すり、と足をひきすり、時折床に片手をついて、それは迫つてくる。

「警部、発砲許可を……」なかにいた一番冷静な警官が櫛崎に言つた。

櫻崎は返事ができない。
判断しようがない。
コレが映画のなかな
ら迷わず発砲。

「全員銃を抜け」責任は俺が取ればいい。
「いつでも発砲できる体勢で後退」

いつでも発砲できる体勢で後退

ようやく入り口にたどり着いた。焦りながらもゆっくりと確実に一人ずつ通路から出て、最後の一人が出終わつた。全員銃口は穴に向けてゐる。

撃つのか？ アレを？ アレはなんなんだ？ 許されることなの
か？ 職務内のことなのか？ コレが。誰の頭も混乱している。

今や完全に明るい光の中にその恋らしく姿を現した。

つられて六人が発砲した。櫛崎は叫んだ。

「まだだつ！！！ まだ発砲するなつ！！！」しかし既に、五発の銃弾が化け物を射抜いていた。貫通した弾は組織を大きく破壊して抜けている。しかし、化け物はまだ立つたままだ。そばにいた警官に襲い掛かろうとしている。

「発砲つ！！」今度こそ本当に撃て。撃て。
十八発の銃弾が化け物の体のいたるところに大穴を空けて、ようやくそれは動かなくなつた。

しかし、誰も「言もしゃべる」とことができないでいた。

アレは、司法解剖にまわせるのだろうか？ 楢崎が麻痺した頭で
ぼんやり考えていたとき、穴を覗き込んでいた警官が声をあげた。
「警部、アレが少なくとも三体、こちらに向かっています」

縄梯子を伝つて次々のぼってきたか。

「全員配置につき発砲準備」その判断が正しいのかどうか、いまだ

楢崎はわからない。わからないけれどできることは、いや、やらなければならることは、穴の出口正面に陣取り、出てくる奴を片つ端から倒すことだ。

シーン31 ロインロッカー

何処までもコインロッカーの壁が続いている。アニナと祐二は手元のキーと同じナンバーのロッカーを探してずっと歩いている。だから、後ろから尾行されていることに、気付いていない。

「あつた。コレだ」アニナが見つけ無邪気な笑みを見せる。

なかにあつた紙袋を取り出す。紙袋の中身はずしりと重そうだ。即座にバッグに入れた。

それからふたりは連れ立つて歩き、アニナが祐二に田配せして、アニナは女性用トイレの個室に消えた。

アニナは個室の中で、一丁のリホルバーを取り出す。合格だ。口径も一致する。

一丁に一発の銃弾を込め、もう一丁に一発の銃弾を込め上着のポケットに入れた。奴に見抜かれれば、一発目は無駄玉になる。勝負を決めるのは一発目の銃弾。スナブノーズと呼ばれるそれ（銃身の短いリホルバー）は、大きなポケットに難なく収まった。何食わぬ顔でトイレから出ると、祐二と合流した。

さあ、行こう。これから。渕上退治に。

ふたりは駅構内を抜け、タクシー乗り場沿いに歩いていた。その時、一台の真っ黒いベンツが後ろからスッと来て止まった。

同時に両脇をふたりから捉えられた。黒いスーツ姿の極道四人に。あつと言つ間もなくベンツの中に拉致された。後席にアニナと祐二を挟んで屈強そうな男ふたりが座つた。一人が助手席に乗ると車は発進した。残つた一人の男は携帯で連絡を取つてている様子だった。「ちょ、ちょっとどういうことですか？ 人違いじゃ？」祐二があわてて口早に話す。身に覚えが無いと言わんばかりのそぶりで。それに対し、どすの利いた声で、

「あほたれ、われがきのう撃つたじゃうが。それでうちの会長が頭にきとんのや」と助手席の男が返す。痛いほどよく理由がわかつた。

「なんだ？」ニヒラ「アナが聞いた。

「井沢一家。ほら、ガンジャグループの奴撃つた。老舗の暴力団の会長の息子」

「ああ、なるほど」

「英語でしゃべつとるなや」助手席からすぐまれた。

しかし、彼らは油断していた。いや、なめていた。両脇に屈強な男をつけていたが、銃口を突きつけているわけでもない。こんなガキに小娘、拉致されたらがたがた震えるばかりで、何の抵抗も出来ないだろ？とたかをくくっていたのだ。甘かった。確かに今まで stesso はそのように見えた。しかしこの瞬間思い知る間もなく死ぬこととなる。

「どうせ済上を退治したらやるつもりだつたんだ」

「え？」唐突なセリフに思わず聞き返す祐二。しかし、それより速く。

アナーナは両手にオートマティックを持つと腕を交差させてかまえ、両脇の男の喉から頭蓋骨に向けて撃ち抜き、「こんガキい」とふり返った助手席の男の額も撃ち抜き、運転手の首筋に銃口を押し付けた。

「おどれらあ、本氣かあ！！」運転手の男が吼えた。

「こんなことしてただで済むと思うとるンかつ！！」

「会長のところへ連れてゆけ、そう伝えて」祐二は言われたが、それを先方に伝える前に、今先方が言つたことをなるべく正確にアナに理解させるほうが先決だと思つた。

「こんなことをしたら、俺達ふたりとも殺されることになる、と彼は言つている。ただでは済まないと」俺もそう思つと。

「だから会長のところへ連れて行かせる。はやく伝えて」

「祐二は小さく十字を切つた。どの道、この時点で死刑確定だモン

な。この先、どれほどだいそれたことじょうとも、結果は同じなんだろう。

「俺達ふたりを会長のところへ連れて行け」

「あほだらあ。行つてどりするつもりじゃあーー？」

「それはお前の知ったことじやない。お前はただの兵隊だ。これは俺たちと、会長の問題だ。彼女は言つている。すぐに引き金を弾いてもいいと。そしてナビに入力されている情報で俺が運転して行ってもいい。どうだ。会長に感謝されたければ俺たちを連れて行け」

「どういう意味だ」聞き返す男に、

「グダグダ言わずに、とつと連れていやー シートを思い切り蹴つた。どうだ。ここまで強気に出れば相手も疑い始めるはずだ。こっちのバツクに相当な大物がいるんじやないかと。

「ちい」男は舌を鳴らし、ハンドルを切つた。思つたとおりだ。しかし、命懸けの演技力を要求されるなあ。後はアナガ何処までやる氣かだ。本気で会長をどうにかする氣でいるのか？ そしたら後始末はどうする気だ？

シーン32～34

シーン32 会長愛人宅

程なくして、車は超高級マンションの地下駐車場に停まつた。運転席の男に銃を突きつけたまま三人車を降りた。入り口に向かう。ここで男は抵抗を見せた。アーナに殴りかかったのだ。が、鋭いフックをかわし頸に上段蹴り。軽く飛び上がり返す刃のかけ蹴り。着地すると殴りかかる敵みぞおちに中段蹴り。急所攻撃に息をつけない敵鼻つ柱に鋭い肘うち、続けて銃の台尻をぶち込んだ。敵は鼻を手で覆い、鼻血を流して座り込んだ。

その頭に再度銃口突きつけた。

「力で敵わない相手に追い詰められる気分はどう?」祐一はアーナが言ったままを伝えた。

すっかり牙を抜かれた男に銃口を突きつけたまま、エントランスルームまで案内させた。オートロック式マンションだ。愛人のマンションだろう。

「部屋まで案内しろ」祐一は言われたとおり伝えた。

男がルームナンバーを押す。インターフォンに女の声が出た。

「俺です。恒です。会長に会つて話したいと例の小僧が」

どの程度まで正確に伝わったのだろう。自動ドアが開いた。

「会長に聞いて、良いと言えばすぐに貴様ら弾いてやる」不貞腐れた態度の男を先に歩かせエレベーターで昇つていく。目的の階についた。

エレベーターを降りた男は一枚の扉の前でとまり呼び鈴を押した。チーンキーが外され、すぐに扉が内側から開いた。

「おい。どうしたい、恒?」老人が顔を出した。

「会長、このガキどもが……」堰を切つたように話し始めた男の頭を、

「『苦労』と言つて撃つた。崩れ落ちた男の体が扉をふさぐ。

老人はあつと言つ間に奥へ逃げ去つた。倒れた男を乗り越えてアーナと祐一はなかへ入つて行つた。誰もいない。多分、愛人と会長だけ。

リビングへ入つたとき、老人が日本刀かざして襲い掛かつて來た。日本刀の素晴らしさはアーナもよく知つてゐる。が。老人がふりおろす前に額を撃ち抜いた。

「ひいい」と悲鳴を上げている女に、テーブルの上にあつた車のキーをチャリッと投げて渡した。

「これからわたし達を会長の自宅へ連れて行け」女は多少の英語は解るようだ。コクンコクンとうなずいた。

「さてと。祐一手伝え」と言つて、アーナは会長の体をうつぶせにソファに乗せた。頭だけソファから飛び出る形で。

アーナは拳銃をホルスターへしまうと、さつきの日本刀を持ち出してきた。祐一はいやな予感がした。その通りだつた。

気合一発ふりおろすと、老人の首がごろんと絨毯の上に転がつた。悲鳴を上げる女。首の白髪引つつかむと、その女に向かつて投げてよこした。女のひざにじろんと抱かれる格好になつた。さらに悲鳴を上げる女。

さてと、これから井沢一家の総本山に乗り込むわけだ。たつたふたりで。勿論、俺は何の役にも立たない。もう、何があつたつて驚かないぞ。もし、今夜生き延びて、これから先長い人生あつたとしても、今夜ほど最低の夜はもうこないだらう。

シーン33 召還の部屋

櫛崎を含め警官たちは、終わらない悪夢を見ているようだつた。何体倒しても、後から後からアレが出てくる。数体倒した時点で、穴の周りから亡骸は片付けられ、部屋の中に片つ端から並べられている。もう、二十数体にのぼる。

応援が駆けつけた。警視庁には対策本部が立てられた。捜査本部ではない。対策本部だ。現時点だけで二十体以上の死体袋を搬出

しなくてはならない。マスクの田から隠して。

シーン34 井沢一家総本山

マンションの一室に一體の死体。駐車場に三体の死体の乗った車を残したまま、女の運転するベンツで井沢一家会長本宅へ向かう。首は助手席のシートにある。女は半べそかいでいる。震える手でハンドルを握っている。

アニナがバッグからショットガンを取り出し、祐一に渡した。「自分の身が危ないときは、迷わず撃つて。いい？ あなたは、決して他人に危害を加えられる人間じゃない。だけど、そんな甘いことは言つていられない。今夜だけは。何も考えないで、撃つて」解つた、と銃を受け取つた。腹が据わつた。金玉に力が入つたようだ。足手まといにだけはならない。そう誓つた。

「だけど」と祐一は聞いた。

「どうして、ここまでする？」どうしてここまでやる必要がある？

アニナは、銃口は女からそらさず、サングラス越しに祐一の田を見た。

「どっちにしても、渕上を始末したらやるつもりだった。きのう、わたしが撃つた男、アレがコウのいたグループのリーダー格だろ？ あの男の背景にこれだけのものがあつた。それだけの話だ。あの男を消しても、背後にこれだけのものがある。だから全部消してしまう

ひょっとして俺の？ 僕のためにこれだけのことをやるうつてのか？

「あの夜、ガンジャを落とさせたのは私の責任もある。それに、渕上退治のお礼だ。先にやつておく。わたしなりの験かつぎだ」それだけのために、これだけのことを……？

アニナは笑みを見せ言つた。

「わたし達ふたりで、今夜を『伝説の夜』にしよう。ジャパニーズマフィアが震えあがる」

車が会長本宅に着いた。

立派な門構えだ。井沢一家は古い組だ。有名だが規模は大きくな
い。あちこちに事務所を持つてはいない。つまり兵隊のほとんど
がこの本宅にいる。

「リモコンで開くのか？」門のことだ。

「は、はい」女は従順だ。

「開け」

「はい」すぐにダッシュボードのリモコンを操作した。
ゆっくりと門が上がりゆく。

その先に滑り込んでゆく車。玄関先で停まつた。

「首を持つて降りろ」アニナが女に命令した。

「ひ……はい」恐れながらも必死でそれを手に持ち女は車を降りた。
祐一とアニナも降りた。

玄関が開き若い衆が出てきて駆け寄った。祐一は背筋の凍る思い
だ。

「お疲れなさいまし。御用向きは？」

「投げる」アニナが言った。女は泣きながらそれを玄関に向かって
投げた。若い衆たちの背後に、会長の首がごろんと転がつた。

誰も一言も発することが出来なかつた。ふりかえり、一瞬の間。
そして銃声だけが轟いた。

シーン34

アニナはそこに居た男全て撃ち殺していた。

「ひい……」女が泣きながら走つて逃げていった。

アニナはミニ・ウージーに握り替えた。

なんだあ、いまのはっ！！ 屋敷の中から罵声が聞こえる。

雪駄を履いて上半身裸で手首まで刺青のある男たちがぞろぞろと出てきた。ほとんどの男が手首から足首まで刺青がある。

「オリエンタルでビューティフルだ」小さく呟くとサブマシンガンの引き金を弾いた。銃声が八発して八人の男が倒れた。嘘だろつ。祐二は思った。サブマシンガンだぞ。一発ずつ狙い撃つてんのかよ。途切れ途切れならともかく、流れるような銃声だつたぞ。どうしてそんな真似が出来るんだよ。

しかもアニナのそれは銃身の短いコンパクトタイプ。反動は大きく、自然手の中で暴れる。

「かちこみだあっ！！

「何処の組じやあ！！」

「チャカ持つてこおおい！！」屋敷内が騒然となつている。

何が起こつたか状況はわかつたようだ。だが、いくら暴力団事務所でも拳銃がそこら辺に「ゴロゴロあるわけではない。大抵、手入れのときも大丈夫な場所に隠している。だからつまり、敵が拳銃を調達できるまでもうしばらく時間がかかるということ。

そして素敵なことに、彼らは襲撃者達がたつたふたりだと見破つたようだ。しかもガキと小娘。

「おどれらあ、ぶち殺してやるわあ！！」怒鳴りながら何人もの男が飛び出してくる。と、同時に額を撃ち抜かれて倒れる。肉弾戦になれば分が悪い。あつと言う間にひきずり倒され殺られてしまうだろう。敵の手が届かない距離で倒さなければならない。

手に手にドスや日本刀ふりかざした極道が次々現れる。津波のよ

うに押しよせて来たが、最前列から順番に雪崩をうつて撃ち倒されていく。

「コウ。弾切れ」片手のミニ・ウージーを祐一に素早く手渡す。ホテルの部屋で何度も練習した。祐一は手早くマガジンを交換するとアナに返す。

「もう一丁」そちらも同様にして返す。オーケイ、息もあつて戦える。

応戦しながら死体の山を乗り越えて、邸内に入つていく。玄関に転がつていた会長の頭を邸内に投げ込む。再び起る怒号。長くてひろい廊下。行く手に極道の一団。パン、パン、拳銃の応戦があつた。アナを掠めて背後に着弾する。

「ユウ、身を隠していて」彼女の目がつりあがつている。

彼女にはコンマ5秒後の弾道が見えている。だが、彼女の脳内ではどうやってその情報を処理しているのだろう。踊るように側転して銃弾をかわす。そして応戦し、再びかわす。彼女が応戦するたびに、確実に一人三人と倒れていく。

玄関口から回り込んだ男たちがいた。死体の山を乗り越え、鬼の形相でドスを手に。気付いたとき、祐一は撃っていた。反動は半端じやない。けれど当たつた。すぐさま、コッキングしてもう一発撃つ。祐一が渡されているショットガンは銃身内のチヨーク（絞り）がゆるく散弾が広範囲にひろがる。だから経験のない祐一でも的に当てることが出来る。

人を撃つた。ショックだった。だが、深く考えている暇はない。まだ撃たなければ。

そうだつ。ふりかえりアナの対峙している一団に向かつて立続けに撃つた。大勢が被弾した。血まみれになつて一団が崩れる。さらに追い討ちをかけるようにアナの銃弾が正確に額を撃ち抜いていく。

また、背後から一人。だが、もう祐一は落ちついて散弾をぶつ放す。すぐさま銃身下部のフォアエンドをスライドさせ次の敵に備え

る。

気付いたとき、アーニャの前には一人の敵もいなくなっていた。

「行こう。コウ」死体の上を歩いてゆくアーニャ。その後を追いかけ
る祐一。奥の部屋へ入ると女が一人いるだけだった。
さすが老舗の極道の女らしく、奇麗に髪を結い上げ着物を着て立
つていた。

「あんた達はなに者だい？」静かに問う。

「わたしは、イリア・サローネ」アーニャが答える。

ふつふつふつと女が笑い始める。

「あんた達のおかげで、井沢一家はおしまいだよ。……何処の組の
さしがねだい？」

「無関係だ。自分の意志だ」

それを聞いて女は眼をぎろりと剥いた。

「無関係だつてえ！？ 一体なんだつてつちの組を」

「友達のためだ」簡潔に答えるアーニャ。

「うちはかたぎの衆に迷惑かけるようなシノギはやっちゃいないよ」

「運が悪かったんだ」

「運が……！？」

「わたしの前に立つたからだ」

女が着物のあわせから銃を抜いた。が、アーニャのほうが早かつた。
女は額を撃ち抜かれて倒れた。

「行くぞ、アーニャ」はるか彼方、微かにパトカーのサイレンが聞こ
えてきた。

ダッシュで飛び出し、乗ってきたベンツに乗り込んだ。祐一がハ
ンドルを握った。バックで急発進、門のところでユーターントすると、
夜の道に乗り出し、猛スピードで走り去った。入れ違いに、数台の
パトカーが到着した。

シーン35～36

シーン35 召還の部屋

四十八体。全て片付け終えると、四十八体の遺体袋がそこに並んだ。こうしてみると、事件は大量殺人の様相を呈してきた。

柏崎はカウンターに腰掛けると煙草に火をつけた。現場保全上認められた行為ではないが、ここは現場じゃねえ、戦場だ、煙草くらい吸わせろや、と大きく紫煙をくゆらせた。

アレのなかには腕時計や、ペンドントをしているものもいた。ひょっとしたら身元確認できるかもしれない。だが、遺族に渡してやれるのは遺骨だ。亡骸に、対面させることは出来ない。

さて、警視庁から呼ばれている。あの頭の固い連中に、どうやつて説明してやればいいのか胃が痛い。任意出頭してもらつて事情聴取できる相手かモノを見せるしかねえけどよ。カーペットの上を這いつついるウジを踏み潰した。

西戸崎埠頭

シーン36 車中

「コウ、運転は？」大丈夫なのか？ とアーナの問い。

「ああ、まあ、オートマだし。なんとか」と、答えるがらも、そんなことよりも、と言いたげな祐一。

「俺達、生きてるよな」何度も繰り返し小さくガツツポーズをする。「当たり前だ」とアーナ。後席で平然としている。

けれど、あの井沢一家に殴りこんで、無傷で生きてるんだ。いや、逆に壊滅させちゃったンだ。これが平氣でいられるか、と声を震わせる祐一。

「けど、このあともうと最悪の相手と戦わなきゃいけない」

その一言で、一気に萎えた。そうだった……。忘れてた。渕上がまだだった。どちらかと言えば、こっちのほうがメインイベントだ。

五十数人の極道よりも最悪の相手だ。

「ユウ。井沢一家はどうなると思う」唐突にアニーナに聞かれた。祐二は少し考え、自分の予想を言った。

「生き残った幹部がいたとしても、多分數人。どうにもならない状況だと思う。杯かわした組がどう動くかわからないけど、擁護しようもない状態だな。多分、周辺の暴力団に吸収されて終わりだと思う……」縄張りもしのぎも。

「そうか。理想的だな……」と、アニーナ。祐二のひざにショットガンを置いた。

「弾を入れ替えておいた。散弾じゃなくて熊撃ち用の弾だ。威力はライフルくらいある。当たれば渕上でもよろけるはず」

ひざに置かれたショットガンを左手で握りながら

「よ、よろけるのか……？」と聞いた。

「多分……」自信なさげなアニーナの返答。

「至近距離で自分の身が危ないときは、使ってみて。必ず、銃口を相手に押し当ててね。でないと避けられるから」

「り、了解……」それで、うまくいけばよろけてくれるわけだ。

「ホントはユウを巻き込んでいやないと思つていて。これはサロ二ケの戦いで、ユウは無関係な人間だ。だけど、さつき一緒に戦つて感じた。仲間がいるつてうまく言えないけど、とても良い。ずっと一人で戦ってきて、感じている」

「一緒に戦つた、つてほどじやないけどね」謙遜して見せたが事実もその通りだ。

「けどまあ、俺も何かの役に立つンだ。少し誇らしくも感じた。俄然、やつてやるうじやねえかという気になつた。根がお調子者だ。行く手にガソリンスタンドが見えた。はるか手前で祐二は車を止めた。訝しげなアニーナに「ちょっと待つて」と言い残し、スタンドへ駆けていった。

「すみません」いかにも困つている風を装いスタンドの店員に言つた。

「ガス欠しちゃって。十八リッタータンクとレギュラーリッター
ください」

通常、こういう販売は禁止されている。しかし、ガス欠だと言え
ば大抵売つてもららえる。

ついでに灯油ポンプも買うと精算して三千五百円払い戻つてきた。
三千五百円。これで人類が救えるなら安いもんだ。

次にコンビニで停車し、「瓶ビール」一本買つてくると、中身を側溝
に流してしまい、ポンプでなにかガソリンを入れ、再び栓をした。
「お前の弾が当たつても、まだ動いていたらぶつかけて焼いてやる
リュックに入れた。

「なるほど」

埠頭に着いた。三番倉庫前で車を降りる。海がうねっている。街
灯と停船している船舶の灯りを映し、風が湿っぽい。

「行こう」彼女が言った。祐一は覚悟を決め、リュックを背負いシ
ヨットガンを手にした。

シーン37～38

シーン37 第三倉庫

ガラガラガラと大きな扉を開けた。真っ暗闇のなかに一步踏み出す。扉からの灯りで高く積まれた木箱がおぼろに浮かび上がる。

祐一は電灯のスイッチを探した。扉の脇の鉄骨にそのボックスがあつた。スイッチを入れる。だが点かない。再度試みる。だが、電灯は点かない。懐中電灯で配線を追う。柱の上のほうで切られている。

「なるほどね」アニナが呟いた。この闇のなかで襲う気だ。

ふたり、目が闇に慣れるのを待つ。だが、圧倒的に敵に分がある。相手はバンパイアだ。夜目が利く。

祐一が懐中電灯の光を四方八方に走らせている。だが、何処にも敵の影はない。アニナが気付いた。格好的になつてている。

「ユウ、ライトを捨てて」言い終わる前に。

闇のなかを風が動いた。

「うわっ」と祐一がしゃがみこむ。その頭上の空間を鋭い爪が切り裂いた。銃声轟いた。祐一が撃つたのだ。だが、避けられた。アニナは撃とうとして銃口をさげた。今、撃てない。祐一に当たる。嘲笑を残し、バンパイアは再び闇のなかに身を潜めた。

アニナは敵の卑劣な作戦に気付いた。わたしの仲間を先に殺し、わたしの動揺を狙う気だ。

「ユウ、わたしから離れないで」言われなくても既にペタリとくつついでいる。

闇のなか再び襲い來た。狙いはやはり祐一だ。アニナは祐一の体をかばい突き飛ばした。祐一は床に転がつた。鋭い爪がアニナを掠める。ミリタリージャンバーが大きく裂けた。オートマティックを立て続けに撃つた。だが、敵は再び闇に消えた。

「そうかい。そういうつもりかい」祐一は立ち上ると膝の埃を払

つた。こういう風に使うつもりじゃなかつたんだけど。リュックにライターで火を点けた。化学繊維のそれはあつと言つ間に燃え始めた。倉庫の奥深くめがけて放り投げた。破裂音。一本のビール瓶が砕け、次の瞬間ちょっとした爆発が起つた。中のガソリンが引火したのだ。

「どうだつ」明々と照らされる倉庫内部。隅々まで目を走らせるが敵の姿はない。灯りが点つたことで、くつきりと明瞭になつた闇。その何処かに身を潜めているに違ひない。

ガソリンの火は木箱に燃え移つた。徐々に広がっていく。

「ある程度炎が広がるのを待つて、一気にかたをつけよう」逃げ場をなくす作戦。アニナが言つて、一人はその場でしばらく待つた。「行こう。ユウ」もう充分だ。アニナは奥へ踏み込んだ。離れないようついて行く祐一。

炎の壁の中を駆ける二人。だが、阻まれた。高く積まれた木箱が崩落した。間一髪避ける二人。だが奥へ進めなくなつた。燃え落ちた木箱が行く手を阻んでいる。

「まわりこもう」「

既に火は充分燃え広がり、まるで炎の迷路の中にいるようだつた。「ガスが出ている」頭を低くして、アニナが言つた。だが、それでもうにかかる程度のものではなかつた。祐一は既にたつぱりとガスを吸つっていた。咳き込み涙が滲む目でその対決を見た。

アニナがスツと背を伸ばして立ち上がつた。祐一は地面にはいつくばつている。顔を上げると黒いスースツ姿の死者渕上の姿が見えた。「死してなお、不當にこの世にある死人、渕上。この瞬間が、己が最後の時と知れ」燃えはぜる音のなかに、凜としたアニナの声が響き渡る。

対するは悪魔の嘲笑渕上。

「サロニケ。目障りな一族よ。非力な人間が何故我が行く手に立つ？」

「我が一族が非力かどうか、その身を持つて知るが良い」

嘲笑う渕上。

「あの男の娘に何の力がある」

糞、俺も援護しなきや。祐一は思った。だが、一体自分に何がで
きる。渕上の頭上の天井を撃ちぬいた。スレートの欠片が降り注ぐ。
小細工ではない。自分の横の壁を撃つた。スレートに大穴が開いた。
瞬間、新鮮な空気を吸い込む大穴。天井の穴からは真っ黒い煙が抜
けていいつている。大きく息を吸い込んで立ち上がった。

「一対一でもずるじゃねえよなあ」ショットガン銃身下部をコッキ
ングして狙い定めた。

「そんなもので俺はしとめられぬ」ショットガンを見て渕上が嘲笑
つた。

「じゃあ、これならどうかしら」アニナは両手のオートマティック
を捨て、腰のリホルバーを抜いた。渕上の顔色が変わった。
狙い定めた。コンマ五秒後が見えた。見抜かれた。奴は避ける。
それがどうした。彼女にとつてそれは問題ではない。

立て続けに響く一発の銃声。一発目を渕上が避け、その避けた額
に一発目がのみこまれた。つぶれた弾頭からなかの化学物質が噴出
す。それがバンパイアの血と反応する。次の瞬間。

渕上の頭部上半分が吹き飛んだ。鼻から上は吹き飛ばされ、口だ
けになつた顔。飛び散つた血でべつとりと濡れている。あ……がが
……。その口が声をあげる。

「おのれ……。サロニケ……」

「へえ……。脳みそ吹き飛ばされてもしゃべれるのね。教えてあげ
る。これがサロニケに遺伝する力。代々お前達を滅ぼしてきた」
再び狙い定める。銃弾は後一発。見える。もう避けない。いや、
避けられない。

銃弾は左胸にのみこまれていった。ボグツ。鈍い音をたて、胸板に
大穴が開く。心臓を吹き飛ばした。最後だ。渕上。

「きい……」甲高い、猿のような声。

「きええいいい……しいいい」断末魔の叫び。

「ア、アアアモンよ、出でよ」ふりふりとおぼつかない足で、天を仰ぎ叫ぶ。

「我を助けよ。忠実なそなたのしもべを助けよ」血にまみれた口で叫ぶ。

「無駄よ。人間に悪魔は召還できない。地獄で会うといいわ。アモンに」

がくりと膝をつき、つづぶせに倒れた。それでもまだ咳き続けている。

「いいい……我に力を……」

アニナはゆっくりと近づくと、碎けた頭に足をかけ、首のペンダントを引きちぎった。

「お前に似合いなのは死だ」吐き捨てるように言った。

左側の炎の壁がゆっくりと倒れ掛かってきた。

「アニナ。危ない」祐二に手を引っ張られた。間一髪、崩落を避けた。が、測上は炎の中に埋もれた。だがまだ、動いている。しかし、それも次第に緩慢となり、やがて止まった。

「出よう」祐二に促され、アニナはやっと目をそらした。さつき祐二がスレートにあけた大穴から脱出した。ふたりとも煤まみれだった。真っ黒な顔を見合わせ、笑みをかわした。

シーン38 第三倉庫

櫛崎は間近でその焼死体を見た。頭を半分欠損し、胸に大穴の空いた真っ黒焦げの死体。表面の組織が炭化するほど激しく燃え尽きていた。なんだか、全てがわかつた気がした。全ての謎が解けた。簡単だ。化け物退治に来た外国人少女がいたんだ。

で、化け物は退治した。ついでに非合法組織も幾つか壊滅させた。謎は簡単だ。わからないことだらけだけれども。とにかく。もう、終わつた。これだけは確かに言えることだ。刑事の勘だが。

港湾の倉庫群が朝日を浴びている。海は照り返して輝いている。一晩中地獄にいた彼には眩しい光景だった。

日本国際空港

シーン39 国道

国際空港へ向かうだだつ広い道路の歩道を、ふたりは歩いていた。行き交う車があるばかりで、何も無い道。ふたりともさつきから無言だ。

あのあと、アニナはミニ・ウージーとオートマティック、それからリホルバーを海に捨てた。ショットガンは祐一が貰った。散弾なら日本でも手に入る。狩猟法に疎い彼でもそれくらいの知識はあった。いつかまた彼女に会いたい。その時は決して足手まといにはなりたくない。貰ったショットガンで射撃の練習をするつもりだった。それからもうひとつ。決心したことがあった。

「あのや」

先を行くアニナの背に話しかけた。彼女がふり返る。

「あの方。俺、エクソシスト（悪魔祓い師）になるよ。日本には陰陽道とか密教とかあるんだ。そこで修行する。そしたら、いつかまた、会えるよな。俺がエクソシストになれば」彼女はバンパイアスレイヤー。世界の何処かで再び出会える可能性はゼロではない。

「また、バンパイアを吹っ飛ばしてやろづぜ」微笑む彼に、

「きっと」と言うと、アニナは彼に抱きついた。Tシャツの胸で素早く涙を拭くと、少し背伸びして、彼の頬にキスした。

祐一は、これは彼女の国の挨拶みたいなものだ、と高鳴る胸を抑え、自分に言い聞かせた。

その手に、アニナはバンパイアのペンドントを握らせた。

「これは『死者の石』と呼ばれているけれど、悪魔のもたらす狂気や幻覚を防ぐ力もある。導師が使えばその力を強くする。貰って。きっとすごいエクソシストになつて」

ふたりは体を寄せ合つたまま笑みを交わした。

「じゃあ、俺はここで。寂しくなるから空港までは見送らない」 言葉とは裏腹に、その腕は彼女を引き止めたくてたまらない。

「わかった」 アーナはそう言つと体を離した。

「全部、コウのおかげだ。決して忘れない。ありがとう」

彼女にしてみれば、ここは世界の果ての国だ。一度と訪れることがあるとは思えない。祐一とは多分これが最後の別れになる。

名残惜しみゆつくりと歩き始めた。空港へ向かい。

ふり返りながら遠ざかるその姿を、ずっと、祐一は見ていた。

シーン40 機内 ファーストクラス

日本を飛び立つてすぐに、アーナは強い睡魔に襲われた。くたびれ果てていた。緊張も解けたのだ。無理もない。深い眠りに落ちていった。

そこで夢を見た。幼い頃から繰り返し見ている夢。

霧に包まれた深い森のなかに彼女はいて、奇麗な女人の人人がいる。とても神々しくて女神のような女性。霧の奥には幾本もの巨大な塔がそびえたつている。そこまではいつも見ている夢と同じだ。

しかし、今日は、夢の中の女性が口を開いた。

「三年後、あなたは再びこの国を訪れる。エレボスを捜しに」 だが、夢はうつろい、しばらく後には、夢のこと、そんな夢を見たことも忘れて、眠りこけていた。

シーン39～40（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございました。

本編の主人公ふたりは「エト・エウトクタ」にて重要な役割を果たします。

「エト・エウトクタ」は現在執筆中です。
しばらくお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6836a/>

イリア・サロニケ（エト・エウトクタ外伝）

2010年10月8日15時51分発行